文學士 越迺背山著

時代 笑話 滑稽文學

東京 本郷書院

221
909

特 7

時12
768

自序

文學といつても、いろ〳〵ある。漢詩もあれば和歌もある。俳句もあれば新體詩もある。小說もあれば戯曲もある。漢文的のもあれば國文的のもある。これら、あまたのなかでも、強つぽいものもあれば涙つぽいのもある。眞面目なのもあれば滑稽なのもある。今僕のこれから述ぶるのは、この滑稽的の方面である。滑稽的の方面であるとて、決して卑むべきものでない。道學先生などは、一意に堅くなつて、眞面目〳〵の一點張りであるが、その眞面目の裡に、

明治
38 10 21
内務

眞の滑稽的の分子が、潜在してあることを知らないのである。由來、滑稽と云ふものは、眞面目の間に於て、穩を現はすもので、それ以外に存するものは駄洒落である。それであるから、滑稽と駄洒落とを混同してはならぬ。

僕は、今春以來、宿痾を房州の海岸に療つて、朝な夕なに、自然を友として居る。性來好きな讀書も、加減せよとのことであるから。せい／＼のところ。日々の新聞を讀むのと、友人からの書翰が。唯一の樂である。つれ／＼のまに／＼。いつも堅くるしい事を考へて居るよりも、その裡面に潜在して居る、

滑稽の趣味を捕ふるも、また一興と考へたので、日々の新紙で、讀む眞面目なる問題について、考一考したところで、趣味津々としてつきなかつた。その時局に關し。思ひついて、自分獨りで笑つた談柄を紙片に控へて置いたが。今本郷書院主の希望によつて、上梓することゝなした。仰々しく名づけて時代笑話滑稽文學といふ。

房州の海岸に於て

九月中旬　背山隱士

時代笑話 滑稽文學

目次

一、足塚……一
二、烏の頭……三
三、負て勝伎倆……五
四、言逃げ……七
五、三國奇談……九
六、農談會……一三
七、大男……一六
八、廣長舌……二一
九、三猿……二四

十、大山酒……二七
十一、巻狩……二九
十二、山家の一老人……三二
十三、正直な頭……三四
十四、商人議員……三九
十五、大先生……四三
十六、淺間の岩窟……四八
十七、看板……五四
十八、虎の皮……五八
十九、バルック艦隊……六二
二十、老兵士……六七

廿一、長屋の教育談……七〇
廿二、修學旅行の相談……七三
廿三、カイゼルとツアル……八〇
廿四、醫者と商人……八二
廿五、露語研究……八九
廿六、居候……九四
廿七、韓臣股をくゞる……九七
廿八、內しやう話……一〇〇
廿九、ビリレフ提督と艦……一〇五
三十、號外……一一三
卅一、名譽の負傷……一一七

時代笑話　滑稽文學

目次畢

卅二、紀念碑……一二三
卅三、祝捷會……一二七
卅四、午睡……一三三
卅五、かも知れん……一三八
卅六、魂の入れ替へ……一四〇
卅七、駄法螺の相吹き……一四四
卅八、鮎も飛び河鹿も飛ぶ……一四九

時代笑話　滑稽文學

文學士　越廼背山　述

一、足塚

奉天會戰已前の捕虜でさへ、五萬と云ふことで、六百萬圓位の喰潰し、此喰潰される代價を以て、軍艦を製造たら、何艘とかゞ出來ると、算盤を彈いた、經濟家もあつた。今度は、奉天の捕虜も、五萬以上、然すると、安く積つて十萬ぢやが、喰潰しの殖えるのは、恰も雨後の筍、會戰毎に殖える。戰爭の長引くは、格別心配にはな

らぬが、喰潰しの殖えるは面倒ぢやと、自分の家内に、喰潰しが殖えたかのやうに、口説ものあり。否、其麼氣の小いことを云つては、戰勝國民の態度でない。少し話が異ふが、英國には、公私の慈善事業に依て、救助を受けるものが、二百五十萬人、其救助年額が、凡そ一億五千五百萬圓なりと云ふが、此に比べて見ると、十萬位の厄介物は、何でも無いぢやないかと。鹿爪らしく話すと、甲『さう言れて見りや、然ぢやが、然し媾和談判のときにいつたら、露國は捕虜の給養費は、辨償するだらうか。』乙『サア、そこが露國だから、まづ辨償しないものだと、思つて居るが、萬國平和會議の決議に基くと、將校の分は、辨償することに爲て居るが、一般兵卒の分は、無いやうだから、露は辨償せまい。』甲『何も譯の判らぬ國ぢや、中立違犯は飽まで遣て、給養費を辨償せないとは、其麼ものを、文明扱するも、難有思ふまいから、捕虜引渡しの、時節も來たなら、十萬の捕虜の兩足を、片端から斬放して、さうして露國へ追拂ふ。』乙『夫では胴から上は露國へ渡すが、斬た兩足は何する意りか。』甲『太閤さんの朝鮮征伐のとき、京都に耳塚が出來たでないか。是も戰勝の紀念だから、今回は足塚を、上野公園に……。』乙『太閤さんの耳塚には、理由があるさうだが、今の足塚に……。』甲『足塚の理由は、給養費を踏倒したから。』

二、烏の頭

黒鳩の頭が、白く成たと聞けは、淺草の觀音の鳩の頭が、白く成かのやうに思はれて、面白くも可笑くもなし。けれども今云ふものは、滿洲軍總指揮官の、黒鳩公の頭だ、彼が日本來遊のときの頭と、退却名將の名を得たときの頭とは、余程白く成たとのことだが、其心配の程も察せらるゝ、實に「クロパトのキン上たり下たり」斯云へば、我海軍將校某の、陰囊演説も思出されて、敵と味方と、海軍と陸軍と、其對照いと可笑と、思つて居たところへ。或家の仲働の女中と、飯焚女中との話を聞た。これは黒鳩の頭でない。烏の頭の話であつた。この仲働と飯焚とは、平素あまりなかよく無いので、或時仲働きが、飯焚きの手傳をして遣たのだが。すると飯焚、夫を難有く思はなかつた。飯焚『ハ、ア、今日はめづらしい。お米さんのお手傳へ、烏の頭が、白くなるだらふ』と遣たが、仲働もなか／＼のもの、夫をきゝずてにはせぬ。お米『さうか、烏の頭が白く成ては、私も烏に氣の毒だから、お手傳は、これでお止めだ。』

＊　＊　＊　＊

三、負て勝つ伎倆

甲『黒鳩公も、强情な男だ、遼陽相叶はぬと云ふところで、骸骨を乞ふべき筈なのに、奉天の大敗で、骸骨を乞ふから、人物の貫目が減た。乙『ソリヤ、骸骨を乞ふのだから、貫目が減たに違ない。だが「負て勝つ雪と相撲とる柳かな」で、退却が嵩じて、大敗だけれども、クロハトキンは勝と思つて居る、露軍が勝たと、思ふのでない、ク

ロハト自身が、勝たと思つて居る、兎ても日本軍に勝ないと云ふが、彼人の意見だのに、夫に強られて、總指揮官と成たのだから、其責任を免れたのが、自身の勝だ。』甲『然云へば云ふものゝ、今度まで部下であつた、リチヴヰッチの部下に、改めて第一軍の司令官と、なつたのを見れば、クロハトの勝にもならん。』乙『いや然でない、大敗將軍クロハトの骸骨と、大國は敗れても大敗と洒落るツアルと、相撲を取組だら、ツアルの洒落に團扇が上り、クロハトの骸骨が負たので、不承〱、第一軍の司令官となつた。夫が彼の勝ぢや、何故と云ふに、リチヴヰッチに取ては、クロハトは舅樣ぢや、日本の閣臣に對する、元老と同じぢや、前總指揮官のクロハトだから、リチヴヰッチには、目の上の瘤、嫁と舅、クロハトの勝ぢや。三木某が谷の音を評して、いつも分をとる相撲なれども、分を取は矢張伎倆があるのぢやと、言たことがある、クロハトも、負て勝伎倆がある。』

* * * * *

四、言逃

物は言やうと、聞やうで、妙になるもの。天竺と無花果、日本とスツポンは、昔から、何の中でも、引張出れて居るから、耳新しく聞へぬが、然し能く、味はつて見ると、其間に無邪氣な、興味が出て來て、一座を賑はすことがある。言逃と食逃も、言へやうと食やう、否聞やうで、可笑く思ふことゝ、面憎く、思ふことがある。

食逃、鱈腹遣た揚句に、逃出すのだが、捕まつたら、無錢飲食で、

叩き込るゝのだ、言逃となると、事實を晦まして、責任を免れるのだから、一寸と即席料理には行かぬ、調理て〳〵調理ねば、事實を吐かぬと、一人が話せば。甲『言逃も食逃も、隨分澤山あるものですが、ツマリ人間の屑のすることで、棒にも箸にもかゝらぬ奴等だ。』乙『棒にも箸にもかゝらぬ奴の、食逃言逃は、仕方がないとして、人間の屑で無い奴の、言逃食逃が、世を毒すること甚だ大なりぢや。クロハトはあれほど、大敗して居ながら、かれの戰報を見ると、豫定の退却、豫め備へたる陣地に退却、或は鐵嶺を通過せり抔と言て、いつも言逃ばかり、義理も糞もあつたものでない。』乙『其麼奴でも、軍法會議で嚴重に調たら、言逃は出來まい、屹と事實を吐くだらう。』乙『なか〳〵言逃が上手だから、實を吐くまい。』甲『けれども開戰已來四十萬の損害と、云ふことだから、十萬位の後家が出來たに違ない、此等の人に、何と言譯すると遣たら何だらふ。』乙『ソリャ君、後家なら屹度、引受ると吐すだらふ。』

* * * * * *

五、三國奇談

獨乙皇帝の巡禮とか、書た新聞があつたで、御報謝おたのみ申すと、言のか知んと、早合點したら、然でなかつた、御交際上、各國の帝王を、御訪問になつたので、其廻國が日本の巡禮に、能く似て居るから、さう言のであるとか。又賭博を打損ねたと云ふから、今度は早合點せずに、能く聞て見たら、巡禮外交が、失敗氣味ぢやと

の、謎だと聞て、なるほどと合點がいつた。彼國には、火事場泥棒と云ふ遣口がある、放火犯人と、棒組になつて、火の手の盛なるとき、人の狼狽へるとき、其機に乘じて、物を取のぢやと、いつた人があるから、火事場泥棒とは、口穢なし、漁人の功と、言れまいかと言たら、夫は宜き思付だ、懸賞ならば、まづ〳〵山東省。(三等賞)

露國がフインランド人に、一百萬磅で、二萬六千の命を賣たとか、なるほど世界の裏店國ぢや、政府と人民の間に、變な賣買も出來るものだ、戰時ぢやから平時よりは、幾許か價値も高からふ。キシネフや、冬宮前で、澤山命を取たから、此機會を利用して、賣出たのであらふか、裏店住居のものゝ爲ることは、特殊のことをやるものだと、尤も愚なる考へを起した。すると君怪なかれ、ロスのやうな

大口ではなけれど、支那や朝鮮の役人共が、命の小賣をすると聞されて、愚なる考と思つたのが、愚なる考で、事實は確はあるやうに思る。又露帝は、寺院のお賽錢を、拾ひ集めて戰費にするとか、世界未曾有の大戰にあたつて、些と見苦ひと思へど、ロスの皇帝は、ギリシャ教の教主なさふな、さすれば寺院のお賽錢を、拾集めても無理はなけれど、たゞ何となく、變な氣持がする、けれども佛人は、變に思はぬさふな。

佛の役人は、流石に巴里で成長た人だけあつて、萬事に拔目が無い、特に料理と來ては何の料理でも爲る、トケーとか云ふ人が、昨年七月十四日、佛國々祭日に、人肉でスープを作り、其死人の親戚朋友に、饗應したさふな、何も文明國の人だけあつて、上手に今日まで

隠して居た。此から見れは、露人は馬鹿ぢや、文明の皮を、被らぬだけ馬鹿ぢや、佛の文明の皮を剝ば、やはり露人と同くで、露佛は表面から見れば、一致する點が無いやうだが、鬼の女房は鬼神で、暗に一致するところがあるから、同盟をするのも、金を貸すのも、中立違犯して、盜賊の尻腰を推すも、先あこの野蠻根性から、割出す寸法だらふと、見て來たやうに話して居ると。露も佛も、逆殺をやるが、然し佛人は露人の如く、呑氣と無感覺で、大國民と社會に見らる〻やうなものでは無い、實に手際の好い手品師のやうだ。此頃バルチック艦隊付の病院船が、柴根に寄港したら、病兵が直ぐ健康兵と、なつたとのことだが、如斯な手合が十年前に、李鴻章や伊藤侯をいじめたのだから、堪たものでない、伊藤侯が恐露病も、其時が病付で、それから自由湯を飲だり、日英同盟前に、轉地療養もして見たが、俄に恐露病の氣味がして、皈朝つてから今に全快せんやうだと聞されて、此際内閣の諸公に、傳染してはならぬと思つた。

＊　＊　＊　＊

六、農談會

近傍に農談會があるので、ソリヤ面白しと、早速行て見ると、滿場當業者ばかり。まだ演説が始らぬので、其處此處に、種々の話がある、ヤア日清戰爭のときは、外國人が日本の軍馬を評して、猛獸だと言たさうな、夫からと云ふものは、去勢術を遣れ、々々々々遣れと、度々演説で聽くものだから、一同みなやる氣になつた、今度の

日露戰爭に、日本の軍馬を非難する奴の居らぬのも、全く去勢術を施した結果だらふと、村長のやうな人が話せば。助役『如何にも然です、去勢術を施した爲に、猛獸の名がとれました、日外や[redacted]侯にも言た、新聞があつたが、狒々の名が消滅なると、言なかつた爲か、去勢術は大の御嫌なさふな。』記者『先日某村に於て、去勢術を遣つた、技手のお手傳をした馬喰共が、拔取た睪丸を、晩酌の下物にしたとか、某技手の話でしたが、生馬の目を拔くと云ふことは、聞ては居ましたけれども、見たことが無いのです、今では生馬の睪丸を拔きて、晩酌の、下物にする、實に鼻持がなりません、然し此奴等は、大方は親の膝を嚙つた連中であらふ』抔、いよ〳〵出ていよ〳〵奇、其中に開會となつた。紳士余がお話するは「人糞肥料の説」と

やつて「汚くても臭くても眞面目に聞て頂かねばならぬ日本では肥料の第一として用ひて居るが外國に於ては何の價値もないのである」其より一段聲を高くして「學者の説に依れば人間一個一ヶ年の排出量は九十貫目で擔ひにすると六荷になる」此とき僕が思つた卅年前は學者の名は文學者の專有であつたやらが今は文學者の專有でないけれども學者の説に依ればが耳新しく妙に聞へた「先づ一荷二十錢とすれば東京市民の總數を百五十萬と見て一ヶ年の總排出量が一億三千五百萬貫目之を擔ひにすれば九百萬荷、其價格は實に百八十萬圓だ、之を全國の上から見たら非常の巨額になるであらふ六千萬や七千萬は何でも無い、此金を以て軍艦を造つたら一萬噸以上の戰鬪艦が十隻も出來、巡洋艦ならば七十隻以上は確かに出來る、何と立

派な艦隊でなからふか、佛の中立違犯も口紙を以て爭ふに及ばない。此艦隊を以てバルチック艦隊を徴塵にしたら、港灣をかしたくても借る艦がなくなつて了ふ」といつて壇を降つたところが、一同口を揃へて戰時に有益な演説を聞た、此艦隊をもつて奮戰したらロスの艦隊は粉碎ぢや。ソリヤ其筈全國民が呍と氣張のぢやもの。

七、大男

二人の農夫が田を耕しながら、聲高に話してるのを草摘ながら聞て見ると、半白の人の言ふには、『義太郎さん、今度の徴兵檢査にお前の家の忠吉さんが合格たかい。』義『忠吉は合格りました。已前ならば檢査に合格ると親も泣き、子もなくと云ふ工合なのですが、只今では親も喜び、子も喜ぶ、家の忠吉なんかは一死天恩に報ゆるとか言て居ます。』半『家の孝太郎も合格たが、御同樣です。平時には泣くのですが、戰時には喜ぶ理屈が判らないやうだが、此が言ふまでもない、國辱は忍ばれないと云ふことが、我々に判明たからでせう。』義『此田地を耕作する人が無くなるとも、三年五年繼續ふとも、戰場へ來たロスは一疋も殘らず打殺して、心の底から降服させなけりや、堪忍はならない。然し身丈一寸違ふと、十二時間に一里の差があると云ふことですが、身丈の長い士官と急行をやつても、少々骨さい折りや、半里と違ふことは無からふナア。』半『然とも其樣理屈で推したなら、ロスの逃るのには兎ても追付る譯は無いけれども、十分追

擊の功があつたではありませんか。己も孝太郎の合格たのが嬉くて昨日村長さんの宅へ御禮に行たよ。其時村長さんの御話に、世界の大男と云ふ奴を英國に見世物にして居る、アジアロシアとベルシヤの國境のシヤルコツフと云ふ所に生たので、年紀が廿五歲、名はウスタス、マツシユナウと云ふさうな。身の丈は九尺八寸二分五厘、重量は四十貫四百四十匁、更に驚くべきは彼の大食なること、一寸と喰べても一度に普通の人の六人前、ビールばかりでも二升五合飲ので、六尺三寸五分の大砲萬右衛門も、之に由て見れば眞箇の小男ぢやと云ふことであつたが、村長さんていものは、新聞をお讀なさるので、いろ〳〵なことを知て居なさると、感心して聞て居たが、傍にお若いお方が一人あつて、お名前は聞なかつたが、其お方の話に其樣もの

が世界の大男だらふか。世界の大偉人は日本の東郷さんぢや。ロスのバ艦隊も出て見たは見たものゝ、東郷さんの意氣に壓迫れて眼が暗み、英の漁船を砲擊した。夫れからあとはロスも悟つて、尋常な旅行では可ないとて、遂に木賃泊りをすることにした。底で佛人の目の速こと驚くべしぢや。世界に尤も賤んで爲てのない木賃宿をシエルブールを始めとし、次がモロツコ其次がチブチー又其次がマダカスカル最も近きカムランが東洋の方の打止めらしい。斯う木賃宿を始めたものゆゑ。蛇の口へ蛙だらう。木賃泊りを爲たがる、快諾する世界的の乞食の甘味を絞る。斯うなつては可哀相だが。此乞食また世界的に泥棒をするから、日本が木賃宿へ警告する、又一方には龍宮世界から東郷さんへ感謝狀が來る。先般は魚族共へ御馳走

を下さつたが、お近い内に又よろしくと云ふことなさうな。ところで木賃宿のお終のカムランまで來たも？東郷の鼻息が一千海里を隔てたるカムラン灣まで響くので、ロスも腰を拔して居る。夫を追拂ひ出せ打殺と云ふのぢやから、其心事は思ひやられる。或人は『東航を悔める敵の艦隊は臍をカムラン灣に潜みつ』と讀だが僕ならば斯うやる、東郷を恐るゝ敵の艦隊は、だビールの二升や、三升位でない。最う露の海軍の全隊を飲で居る大食冠ぢや。是が世界の大偉人とのお話であつたと、義太郎に話すを聞て草も摘ず、日の暮るのも知なんだ。

＊　＊　＊　＊

八、廣長舌

日露の戰爭が始まらんとするとき。世界の人が大國と小國、文明と野蠻、立憲と專制、西洋の强國と東亞の新進國、露兵は陣地を固守するが長所、日本兵は突貫が長所、實に世界の見物ぢや抔と算へて見れば、いろ〳〵の批評があつた、成程大國だけあつて、一軍隊を國境外の極東へ送るにも、幾十日と云ふ長時間を費さねばならず。白旗、赤十字旗、日章旗を亂用し。すべての公法を無視するところ、强國と云はるゝ國の態度であらうか、國民として砲口を主權者に向ける蠻力の强國、殊に開戰已來一度も攻勢を取たことの無い。何時も土方同前のこと許して居る、彼等が長所も日本の勇武には敵しが

たく、最う滿洲から追拂はれ。屈服するより爲方のないありさま。實に世界の見物である。又日本は何かと云ふに、戰勝國として世界に歡迎せられ。大山將軍の戰略はナポレオンに優るとも、劣らざるものなりと云ふにいたつては、彌よ世界强國の列に入た氣持がする。雖然、日本が强く成ただけ、色々疑惧を懷く國も出來る。佛が斯うの、獨乙が斯うのと。此等の國が然思ふも當然だらふが。不可思議なのは米國々會の軍事調査委員長ジョンパル氏は日本は露に勝たる後、東亞より白人を驅逐せんことを企つべし。而して其手始として臺灣の南に連る、ヒリッピンを買はんとすべし。米國若し應ぜざらんか。日本は事端を作りて米國と戰ふべく。米國は七千浬の遠處に於て日本と戰へば、露國と同じく敗北の外なかるべしといつた。實に日本を誤解するの甚だしきぢや。眞面目なる米人は耳を假ぬ。況して日本人は尙更のことだ。日本人は米が日本を世界に紹介して、而して文明に誘導して呉れたことを忘るゝものは一人もない。開戰已前でも軍費に、恤兵に、赤十字に、軍人遺族救護に、其上特志看護婦が來る、諸有る方面に好意を表して居る米國に、謝すべき道の無い位に思つて居る日本人が、其樣不義理なことは決して爲ない。

甲『無理に買つて呉れと言たら如何する』。乙『如何あつても買無い米に對しては永く信義を守る。』甲『是非にと談判を持込んだら如何する。』乙『最う其時は爲方は無い、下田附近先年渡來した同國水師提督の紀念碑の在る處でやる。談判委員は島田と井ノ角、彼等は衆議院での廣長舌であるから。』甲『彼等より外に人物は無らふか。』乙『此談判はか

れらに限る。米の談判委員が來たら例の廣長舌をペロリと二三度出さすのぢや。』甲『其は甚だ失敬ぢや。米人は狂氣と云ふだらふ。』乙『いや狂氣ぢやない字違い。』

* * * * *

九、三猿

尻の大さ臼の如しといつたとて、餅も搗れねば米も搗れぬ。小さな雪隱に入ることならず。強て入らんとすれば、隣りの人に地震かと怪まれ。頭の長きこと壽老人の如くでは、ちよつと小座敷に座つて居ても、天井裏を突通して屋根の上まで頭が出る。煙突にしては短いが、奇體なものだと小兒等に石を打付られ。當人も迷惑、人にも

氣の毒がらる露の宿將、ドラゴミロフと云ふ氣ながな大將は、四年の後に至つて、始めて日本に大打撃を與へ得へしと、奇なる長計を露帝に進奏したさうだが、兎ても本氣の沙汰とは受取れぬ。今日の場合あまりに氣の長き人かなと、却て世界の人に馬鹿にせらるゝ、某國の如く何事に付け人が騷くと、直ぐ長い手を振り舞すが、長い手は平生は膝の上にも安かね、欠伸すれば手が天井につき當り、客と握手をするときは三間も五間もへだてねばならず。宜こと二つなしぢや。又足の長ものは歩みも速いものぢやさうだが、クロパトの足も餘程長と見えて、奉天からセントピータースボルグまで一飛に行て、またハルピンまで戻つて來たが、馬に乗れば馬の足が六本に見え、進む用に立るのか、逃る用に立るのか、余所目には判らぬが、

大方逃るとき四本の馬の足では不足なので、長自分の足を加へて、合せて、六本で遣付るのであらふ、夫で追付ねば馬諸共汽車に乘る。汽車は快走る。馬は六本で快走る。其速きこと鐵砲丸の如しとでも言ふべきか。然し司令部にでも居るときは、不自由極まるものであらふ。奉天陷落の當夜英國公使館に晩餐會があつて、我大臣連も各國の公使連も多く出席した。唯だ露國と同盟國の公使が、不見主義で書記官二人が來たさうな、其時寺内陸相へ電話が掛たので、陸相が出て往たが、間もなくニコ〳〵もので復席した。何かと問ふと、「唯今奉天を占領し、且つ敵を擊攘中との電報が參つた」と答へたので、英國公使のマクドナルド第一に孰れも盃を上て萬歲を唱へたが。唯二人の書記官は聞かぬ風して、喋舌らず相顧みて苦笑して居たさうだ。見ず聞ず喋舌らずで徹すもなか〳〵究屈なものであらふ。若尻の大い頭の長、氣の長、手の長、足の長、此五を一人にて具ふる人あらば、五不自由の人と云ふべきぢやと。

書生『見まい、聞くまいは如何なるのです。口から出鱈目遣て居たら。

先『其れには佛と氣が付かなんだ。鼻肌(甚だ)すみません。

十、大山酒

南硫黃島附近に、新に一の領土が出來た、此領土が戰爭で取たので無い、海底の噴火作用に依て今迄何にも無き所に、新に島嶼が生れて出たのだ。又滿洲に日本の大山がしと聞ては、滿洲に日本の大領

土が出來、大山と命名したかの樣に思ふ外人もあらふ。否其樣馬鹿はあるまい。雖然外人が日本を是まで誤解したことが少く無から、然思ふ者もあらん「大審院下女はお寺と取ちがい」ぢや。多くの外人中には然思ふものは、確に居る、いや〳〵今度の戰爭で、日本に對するすべての誤解は、消滅た。滿洲の大山とは、領土の前名と思ふ者は無い。大山とは滿洲軍總指揮官元帥大山巖侯と誰も知て居る。南歐洲の一士人から、ナポレオン一世が使用した獵銃一挺を大山元帥に寄贈したい、其故はナポレオンは暴慢な露國を懲さんが爲め、大軍を露西亞に出したが、不幸にも莫斯科で大敗した。大山大將の今度の大捷は、地下のナポレオンも定めて滿足に思つて居るだらうから。其紀念に大將の座右に獻じたいといふのださうな。此でも誤解せないことが判明が。然しお近内に臺灣の新高山、旅順の一戸砲臺、大連の乃木町や、黑木町の如く。滿洲を改稱して大山洲となるかも知ん。下戸『私しの好な饅頭に能く似た名を改めて、上戸の好な、銘酒の名前のやうにするのが。私しは不賛成だ』。上戸『日本は滿洲を(饅頭)を食のでない。飲むのだから夫で大山洲(酒)』。

十一、卷狩

頃日飯鄉療養を許されし勇士が話に、露國陸軍大臣が米國新聞通信員に遭つた時、兵員と準備とが日本と匹敵しながら、奉天の會戰で散々に負けたのは、全く露國將校の日本將校に劣つて居るからだと、

傲慢極まる露人も弱音を吹たが、實際さうであつたのだ、先ア日本人の目から見ると、奉天の會戰は昔源の頼朝が、富士の裾野で巻狩をせられたに、能く似て居るやうに思はれて、大山元帥が滿洲の野に於て、ロスの巻狩を遣たのだ。敵將クロバトが自ら包圍せられたといつた。尚且包圍したのだ。包圍は軍の目的であつた。村老『何故新田四郎が野猪に飛乗り、抉り殺したやうに、クロバトを殺さ無かつたでせう。實に殘念で御座ます。』勇『其は然でない口で進むといつて、足で退却許りして居る卑怯な奴を、勿體無い日本刀で抉られぬ。畢竟豆鐵砲が無かつたからぢや。夫は然として大山侯の巻狩が、四十五六萬といふ野獸を狩り盡さふといふ大仕掛ところが、五萬程は打殺したが、十萬位は手負二十四五萬は巻狩を感知つて、急に逃た、殘り五萬程の野獸共が、此處彼處に五千三千と泰然として動かぬから、吾將校始め外國の觀戰武官新聞記者等は、ロスの一粒撰り世界の勇士と、賞讃て居たが、何しても動かぬ。』

村老『泰然として動かぬロスを勇士と見たは買被つたのでは無からふか。私が考へをいつたら、捕虜志願といふのぢや。何であらふ』

勇『捕虜志願でも無い。實はみな腰が拔て居た。』

* * * *

十二、山家の一老人

ある山家に一老人あり。日常青年を相手として、時事を談ずるを以て樂みとして居る。或時青年に向つて話すやう。世の中の千態萬象

は妙なもので、一々味はつて見ると、無限の妙味がある。まあ日本に恐露病者があれば、米や佛に恐日熱とかゞあると云ふ、西洋の籔醫者は日本へ來ればドクトルと云ふげな。日本の筍ドクトルは西洋で何と云ふだらうか、何分其對照が面白て堪らん。青年『貴下は餘程醫ごゝろが御在ます』。老『別に醫科に趣味を持て居る、譯では無けれど、昔のやうに四百四病に病が極つて居らぬ、醫術の進むに隨つて、色々新奇な病名を聞く、時節柄日露戰爭にあたつて、恐露病の恐日熱のと耳に入るものだから、話さずに居られぬ。然し恐露病は只今のところでは、漸々消滅するだらう。恐日熱は仲々消滅はせまい。』

青『戰爭と流行病とは付物のやうですが、此戰爭後流行する病なら、豫防せんければなりません。御妙案が御座ますまいか。』

老『危險なもので無から、豫防はいらぬ。序だから話さう。醫者にも色々ある。第一は國の病を治療するのぢや。』青『國の病とは何樣ものです。』老『先日露國の醫者共が會議をして、何卒人民の願意を聞屆て貰度と、政府へ願つたさうな。此でこそ國醫ぢやと、賞讃た新聞があつた。』青『露國の病とは何の樣な病です。』

老『根本の病が專制と云ふのだらふ。是が露國の國病で、狂氣同樣のことを支那朝鮮の方でやるも此病の作用で、時としては逆殺もやる、此豫防には支那朝鮮の方に、熾に恐日熱を流行させるのぢや。一人でも多く感染させたい。畢竟藥毒を以て病毒を拔のぢや。』

青『是は何も意外なお話を聞ます。貴下は醫ごゝろのあるお方だと思つたら。醫者どころで無い殆ど疫病神。』

十三、正直な頭

露帝が其奉ずる處の神に祈れば、日本の神主も其奉ずる處の神に祈る。彼の祈るところは日本軍に勝たいと祈る。神主の祈るは皇軍の大勝利は勿論。敵國降伏と祈る。昔の軍も今の軍も、戰術や、道具や、服裝はかわれど、其戰爭と宗教とは、密着して離れざるは、東西古今同一では無らふが。劔とバイブルを持しナポレオンの像あれば、戰勝を嚴島に占ふ豐臣氏の畫あり。露は開戰已來續て祈つて、ヲヽ神よが、最早當してコラ神よと遣るものだから、神も堪らん。アーメンドと刎付る。夫でも氣付ないと見えて、リネウヰッチ總指揮官就任の際、部下になせし訓示に、爾等其れ來るべき、大戰に於

て、吾軍に至大なる冥護を垂れ玉ふ、天の父あることを忘却する勿れと、云つて居る。此を日本の俚諺でいつたら、負相撲の褌とでも云ふか、或は尾崎市長の嚙付主義の其れにも似て居る。或は神佛人殺すだからと、ゴットの意を早合點して嚙付て居るのかも知れん。兎ても日本軍に勝べき方略も無いから、術ないときの神頼みと、无理无體に祈つて居るのだらふが、日本の神主は開戰の當時、地方抔では皇軍大勝利、敵國降伏と云ふ標札を建て、さかんに祈つたが、此頃は何した譯か、標札さい見ぬことゝなつたから。祈禱も遣ぬのだらふと、物好にも鎭守の神主を訪問して見た。物好『貴下はこの頃皇軍大勝、敵國降服の祈禱を爲さらぬやうですか。皇軍は大勝だが、敵國はまだ降伏しませんの。』神『昨年中は遣りましたが、本年は遣らぬ

のです。最う十分申上て置きましたから。』
物『神も御忘れ爲すつては不可ませんから、時々爲さつたら何でせう。』
神『其も無益です。』物『如何も不審に思れます。昨年は國家の爲と、燃るか如き熱心であつた貴下が。今日此頃は其冷淡なること、猫の鼻の如く。此には何か理由がある樣に思れます。』神『然云いなさるから、神意を一つ云つて見ませう。昔元寇の時は、今で云ふ露探、其時分の元探寧一山とか申す坊主が來ました。其極秘密の話の端を感付た奴が、日蓮坊主、而して頻りに外寇を振舞したは、自分が何でも事を未然に知つて居る、かのやうに見せかけ。敵國降伏の祈禱は自家專賣の樣にいつて居ましたが。其時にも我々の祖先が祈つたのです。ところが効驗空しからずで、大神風が吹きまして、敵の軍船が全滅

した。今でも神風と尊んで居ますか。今時は然で無い。旅順口攻擊の時抔は、いつも南風で、日本艦隊には極都合よくしてありますけれども、氣の付く人もなし、云ふ人もなし、此では神樣も無駄骨折です。バルチック艦隊も東洋の戰場へ臨みましたから、此處で一番神風と思つては居ますが。敵艦を覆沒させる程の風が吹たら、神風と云はずして、勿體なくも暴風と云ふでありませう。』物『承はれば御尤も千萬、去ながら其樣ことを云ふ者もありますまい。』神『仲々然でありません。先日も鳥尾得庵居士が死なれましたとき、門下の人が舍利があつたといつて、大層喜んで居られましたが、底で新聞記者は、信仰と舍利とは關係が無い。膽石だとか、膀胱石だとか言たではありませんか。話頭が變りますが大山さんや、乃木さんの功蹟は、史

上に大書ができませうが、一兵卒でありながら、勇士として軍隊の龜鑑として、史上に特書すべきものが、澤山ありませう。其れを忘れずに書て貰ぬと、後世重野流で、居るとか居らぬとかいつては、勇士に對してすみません。先ア理屈ばかりの世の中です。』物『化物の子は人間が恐わいと逃げ出して、化物も人間には閉口です。』神『神風は化物ではありません。神風と思はないから神風にならぬのです。』物『今一度祈爲さつたら如何でせう。バルチック艦隊全滅を祈り。効ある者には賜金があると云ふ風説です。』神『賜金があれば始めませうか。實は國家の爲を一年も遣ると退屈して、其上神と自分の差向へ趣味があると云へば云ふものゝ見聞する者が無いので、遂に無味に終る。今賜金があると聞けば、先遣方が宜い。明日からかゝりませう。』物『國家の爲と云へば退屈する、賜金があると聞ては祈禱を遣る、何たる不正直な頭であらふか。神罰は疑なしぢや。』神『欲きものを欲く無い様な顏付するは、不正直なれど、欲き金を欲しと思ふは、正直ぢや。神罰どころか、神は正直な頭にやどる』

* * *

十四、商人議員

某縣某市より撰出の議員あり。頃日、戰地視察が許可に成たので、番頭小僧を集めて送別の宴會を開いた。酒酣なるとき。番『今度はお目出度御座ます。然し東京お土産はいつも、私共や撰擧區民へ、大臣の名刺や何かて御座ますが。今度も又法螺や大風呂敷では困入ま

す。如何ぞ宜しう』と、滑稽半分に切出した。主人大得意然として。

主『御土産の話か其れは渡清へ行て見ねば、汝共への土産は判らぬが。先ア土産の話より、余が話を聞け。政府も我々に對しては、斯く特別の待遇をするものだから。身代が減ふが、家内や親類が小言を云ふても、耳にも入らぬ。芋作の、太郎作の、陳笠のと、口を極めて罵詈せようが。一万や二万の金を蒔散しても、議員になるのぢや。』

番『御尤も千萬、色々御都合の宜ことも御座ませう。晝は議院で大臣を攻撃し。夜は其門を叩き。平身低頭して甘汁を吸ふ奴は、第一流の議員で御座ませう。貴下は攻撃もしなければ、門も叩かぬ。贊成一點張で。』主『余は言ぬが言に勝る主義であるが。サア起立に依て、勝敗を決すると云ふ場合になると、黨の院内總理でも、頭を下て頼み奉る。其時の氣持の宜いことは、言れたもので無い。』番『左樣で御座ますか。私共には其味は解りません。然し近頃の新聞に、『戰地視察に赴く代議士の内に、シカモ一人の公經營に、資益するを目的とするものなく。悉く是れ、火事跡の釘拾ひのみ。火事場泥棒のみ。』と、私が是を讀みましたとき。家の旦那も此仲間か、此仲間でありとすれば、大金拐帶の巡査井深要吉や、贋札賣買の共犯巡査よりも、一層惡人では無らふかと疑が起りました。』主『泥棒巡査と同一ぢやと思れては、甚だ殘念ぢやが、我々の戰地へ行くのは、現今亦は戰後に於て、甘汁でも吸ふと云ふ譯でも無い。新聞の口調で云へば火事跡の釘でも拾つて、他日議會が始つたら。戰場で拾つた釘で、政府の穴を突のである。即ち戰後の經營に注意を促すのぢや。然うせん

と、彼等は一も二もなく。時局々々で我々を盲從させるから。』番『其様ことは、戰地へ行ずとも、內地でゝも判明筈です。故と戰地へお行きなさる必要は、御座ますまい。幾萬の將士が血を流した戰地で、代議士の假面を被つて、私に火事場泥棒とは、在ふことでは御座ません。兵士は一身を國家の爲に、犧牲に供す。代議士は一身の爲に、國家を犧牲に供しては、當家の名折である。お止め爲つたが宜らふ。』主『汝は然言ふけれども、釘を拾ふが公經營ぢや。今の政府は何でも蚊でも、時局で片付るから。其時の材料にするのぢや。』番『理解て居ります。惡新聞記者が原稿を賣付る手段と同じでせう。其様淺墓なお考では、困入ます。』主『今の政府は仲々商賣が好きだよ。鹽も賣る。煙草も賣る。山林も拂下る。議員も買ふと云ふ工合であるから。政府の穴を掘くる釘は、急度買ふて呉れる。魚ごゝろ有れば水こゝろあり。買ふ心があつても、賣物が無ければ大迷惑ぢやから。己も戰地へ賣物仕入に行く。』

十五、大先生

或所に大先生と綽名する者あり。何故かと問へば、何物にでも、大の字を付たがる處から、大先生と云ふので。今では近隣で誰知らぬ者は無い。行て其話を聞くも、一興〻やとの評判を聞いて、好奇心に驅れ行つて、聞く氣に成つた。其門を伺つて見ると、大先生歡んで迎ひ。『斯様九尺二間に住居つて居る。而も五尺に足らない私しを、

世人が呼んで大先生と言ます』と。直樣大氣焔を吐く。訪問者『成程左樣です乎。其は御迷惑なことでありませう。』大『別に迷惑なこともありませんが。私しの平素の話に、大の字の付くことが多いから、大先生と云ふので、最早然聞たら大の字を抜にして、話さうと思つて勉強しても、出來ないので、今貴下と話しても、成べく言ないやうにするが、私の大勉強ぢや。大得意を捨るのぢや。』訪『然大勉強するにも及びますまい。大の字の付くも面白ぢやありませんか。時に大先生、此頃は何處へ行つても、戰爭の話、ヤア陸軍が斯ふの、海軍が斯ふの、戰死軍人の葬式、負傷勇士の皈郷、此戰爭話の爲に、世間百般のことが忘れられて、了つたやうな氣持がする。農は田を耕しながら、商はあきないしながら、總ての人が此樣工合で、何處ともなしに皇軍の大勝を祈り。敵國の屈服を期するは、擧國みな一致して居るやうです。』先『然とも々々々、我國は建國己來の大戰、又世界は戰史あつて已來の大戰、陸戰も大戰ぢやが、海軍も又大戰です。斯る大兵を指揮する、大山大將も大將です。大日本帝國の大艦隊を率ゐて、何處に潜伏して居るかを世界の人に知らさぬ、大伎倆を有する東郷大將が、在しやるからして、今度の大海戰に於ても、敵の大艦隊を大粉摧、オツト大の字を付けすぎて、敵の艦隊にまで、付けましたから言直します。敵の艦隊を粉摧することが出來るのです。是を思ふと、大愉快で堪りません。其からマアお聞なさい。露は大國といつてるでせう。だが華山と云ふお方が、世界の裏店國と言れたで、早速地圖を披ひて見ますと。成程世界の裏店です。少しも活

氣の無い、大裏店、是を世界の裏店と銘打たは、何とも言れぬ趣味があります。若此に大の字を付けますときは、大々と二つも三つも付けなくつては、追付きません。底でロスは又大國民だと言て居ませう。其を蚯蚓的國民だと評した人があります。此も仲々面白い、彼の大きな體軀で、蛆虫同前の意を持つて居るのでせう。鳥尾得庵居士が無神論の中に、糞桶の中に居る蛆は、人間の目から見ればこそ、穢汚い臭いと二目も見ねど、糞桶に生息する彼に取つては、彼が感得した無上の樂土ぢや。樂土なればこそ、何の痛痒をも感せず。愉快に生息して居る。人間の毎日の排出物が、彼に取つては新鮮の御馳走だと。此に依て見ますと。蚯蚓的と云ふもこれと大同小異で、我々が彼樣專制の下に、如何して生息がなるものか。何故獨立自主

の思想が起らんか、最とも劣等なる農奴などいつても、少も痛痒の感じが無い。却つて言ふ人を、馬鹿にして居るやうです。此裏店的の大國が、蚯蚓的の大兵で、大敗を遣る者だから、大國内に大騷亂が持ち上る。私は此を、大泥棒石川五右衛門の仲間喧嘩と思ふ。泥棒と泥棒のことだから、何方が殺されても、打撲れても、少も氣の毒でない。其而已でない。一層同士打して、みな死んで呉れば宜いと思ふ。世界の利益人道の爲であります。先年大國の大將軍クロバト、我國へ來朝したとき。漁夫の娘に對つて、露は大國と思ふかなど、大言を吐て暗に、我國を輕ずる口吻を洩した。私しは其時大不滿、大刀を提げて唯一打と思つたが。津田三造の二の舞、してはならぬと思ひ止つた。其から最早私しが、平素言ふ處の大の字は、露

國へ放逐して仕舞ふと思つて居る。』助『其は如何した理由なのです』。大『されはロスは上下共に何にでも、大の字を付つたがるから。』助『貴下は然仰在しても、大の字の仕用はニゴラズです(濁ラス)』。大『成程左樣か、大と讀むか其で大國、では——皇帝もニゴラズだ(ニコラス)』。

※ ※ ※ ※ ※

十六、淺間の岩窟

淺間の岩窟に籠つた人があるげな。浮世の塵を厭ふてであらふか。聞けば漢學者なりと云へば、夢に周公と支那老大國の將來を相談する意で、身を清淨の境界にをくのであらふが。なるほど世界の塵を拂ひて、世緣遠き岩窟に居たら。神を念ずれば神も來り。佛を念ずれば佛も來り。周公を念ずれば周公も來るであらふと思つて、淺間の煙りをながめて、佇立んで居ると、知らず睡氣がさした。白衣の老人何處ともなく出で來り。君は妙なことを思つて居る男だ、と見たかのやうに言るゝので、ハテ不思議と思つたが、左樣で無いとも言兼て、お推察の通り、妙なことを思つて居るのですと答へた。すると老人、莞爾笑うて、昨夜俗界に、最も人望ある神さまの方では、金比羅さま、稻荷さま、佛の方では、善光寺不動さまと云ふ、方々が淺間の岩窟に大勢お集りになつて、種々の御話があつた。話して聞かさう乎。變哲『如何ぞ、お聞かせにあづかりたう御在ます。』老『夫なら話すが、新聞記者抔に話すことがならんぞ。直に有の無のと書く

ものだから、近頃は神佛もお困りぢや。底で或神さまが云はるゝには、『我々は王政維新已前は、年に一度は必ず出雲で集會をした。夫が太陰暦が太陽暦に成つた爲か。其集會を自然と、俗界の人も云はなくなつた。其内千家も東京へ行つて、役人になる。お給仕頭が居らなく成つた、爲でも無らふけれども、遂に集會は廢れて了つた。日露戰爭のお蔭で、先ア久々で諸神等のお顔を、お互に拜見するやうになりました。』と、是が開會の辭であるか。すると、佛けの方では、我々仲間には何處で、集會をすると云ふ規定も無つた。だが傳敎弘法が非常の盡力をしたので、神佛和合して鎭護國家の義務を盡して居たが、夫を混合とまで見らるゝやうに成た。其が可の不可のと、書生上りの役人共が、無鐵砲な議論を立て、美術品や建築物までを、打毀し。余程景色を惡くした。其儘で存在ら、國寶と成るべき物も、澤山あつたでせう。惜ひことでした。然し今度の戰爭に付て、俗界では擧國一致。我々も神佛一致して、國家を護らんければなりません。此岩窟に神佛の會議を開くも、全く戰爭の賜であります。

金比羅『十年已前の日清の戰役には我々始め、鳩や狐までが戰地で働くから、日本軍が負ないとかいつて居ましたが、彼時分は日本人が自國軍隊の強きことを、自信する力らが無つたから、軍隊の強き根元を暗に我々に皈した。其時分は我々は誠に迷惑で、　至尊に對し奉り、申譯が無いと思つたけれど、致方が無つたが、今度然云ふものは一人も無い、軍隊の強きことを自信して居るものだから、皆、　陛下の御威稜と云ふので、我々も重荷を下した心地

がする。』不動『人民の然う思つたは、無理はなけれど、當局者が自國を信ずる力らが無つた爲、耻を世界に晒し。十年國民が恨を飲んだが。今日漸く飲んだ恨を吐くことができた。國の宰相は愼重に、遣て貰わねば成ません。』荷稲『是まで我々に祈願を爲る奴は、十中八九まで無理無鐵砲の難題を云ふので、御禮には石の鳥居の、金の燈籠の、酒を禁ずるの、鹽を斷つのと、理解奴でも我々の前へ來れば、何故彼樣に理解ぬことを、云ふだらふと思つたが、開戰已來の祈願者は、石の燈籠の、金の鳥居のと、御禮を先に立て、祈願するものは無い。皆出征軍人の家族やらで、國家の爲出征軍人の武運を祈るので、其至誠實に心に底があるなら、心の底の底より溢る。其美さ思はず、清淨殿の扉を推開いて、頭を傾けることがある』。善光寺『露國政府は寺院の淨財を、捕虜としたさうですが。日本捕虜の少ないのに、劫を煮してのことでも無らふ、此際我々の淨財は、すべて軍人遺族の救恤金としたら、何如です。』神『至極結構なお話ですが。然し我々の淨財も、積立てあらば、此際直ぐ出來得ることではありますか。惡人共が居るので、多分は消費て居ませう。是非此惡人共を征伐せんけりや成ませんが。淺間の鬼に一任したら如何であります。』佛『征伐だけはお止なさい。神佛人殺さずです。』不動『いや是非遣るべしだ。我劍を鬼に持たす。』佛『其こそ似合ぬ。鬼に金棒でこそあれ。』不『似合ぬところが神佛人殺さずです。鬼に棒を持すと殺すから。劍を持すのぢや。』神『妙なお話ですナ―。』不『い―妙でも、何でもありません。惡人共の方面で、無暗矢鱈に劍突くのぢや』との老人の話を

聞いて居ると。馬鹿奴、此様路傍に居睡する奴があるものかと。査公の劍突くつたで、目が覺た。

＊　＊　＊　＊

十七、看板

黄昏に友人と連立て、何處ともなく散歩を試み。フト目に付たのは二三拾間先きの屋根の上に、ある人間の頭の看板だ。友人『右大將源の頼朝は頭の大きい人だつたげな。彼は頼朝の頭の看板で無からふか。若頼朝の頭の看板なら。嫉妬と兄弟不和合の藥か。又は兵馬の權によりて、政權を横取した先祖ぢやから。口車と陣笠に依て、政權を横取しやうと云ふ、政黨連中の倶樂部の印しで無らふ乎』と。あられもなき駄法螺を吹きつゝ、歩みを進むれば、遂其商店の前に來た。友『ヤア毒滅の看板であつた。僕の考へは間違つた。誰の頭であらふ。』伴『あれはビスマークの頭と云ふことだが。彼を鐵血宰相と云ふではないか。鐵はくろがねぢやて。彼れが身體の色が梅毒で、瘋病色であつたげな。其様梅毒も此藥で治癒たとか云ふ意味なさうな。』友『梅毒の藥の看板なら、獨逸あたりで手を延さんでも、東洋のビスマークの頭で澤山だ。此様戰爭してさへも、獨逸まで行つて外債は募らんのに、何たる間拔た話であらうか。考へて見なさい。獨逸のビスマークの頭とすれば、彼の此のと說明が入用。東洋のビスマーク[redacted]の頭なら梅毒の藥の看板としては、說明は不用ぬ。直ぐ理解る。三尺の童子も能く知て居る。商店の考案も頓馬だ。ハイカラ

を遣り損ねて居る。』伴『君は商業學校に居るだけあつて、着想が面白い。看板の話し。今少し聞くことができないか。』友『看板の話なら、幾許もする。先ア牛頭をかゝげて、狗肉を賣ると云ふことがある。文句からが支那風で、彼國は看板に虚僞のある國ぢや。日本は如何かと云ふに、三十年已前の舊式の看板を見たまへ。煎じ詰れば御徳用の一點に歸するので、豆腐の看板ならば四角な、白き、大きな豆腐形の箱をブラサゲて、南禪寺とか、何とか、横列に書てある。其外、蠟燭、足袋、金米糖、なか〳〵大きな物を看板とした、趣味が無いやうだが、左様でない。目で見て、意で味つて見るだけの手數はあるが、隨分趣味に富んで居た。此が看板虚僞なしの日本風。只今では看板も西洋風で、俳優の看板、力士の看板、美人の看板と云ふ工合だが、美人も力士も賣るのぢや無い。煙草やミルクの看板なので、昔は賣る品物を大にして、人の目を注め。今は賣る品物を小にして、美人や力士に注目させる。昔の看板は自家の店頭から動かぬ。今の看板は新聞に廣告するから、何處でも行き渡る。畢竟看板に羽根が付たかと思ふ。此看板を利用して、詐欺をする奴が多いから。早合點してはならぬ。彌次喜多が饅頭屋の店にたづさわつて、一個五厘と聞へて、一番大きな饅頭の看板を持て逃げ。土で作らつたのだと聞て、閉口したことがある。モルガン先生も西京美人の看板たる、阿雪を携へて米國に皈り。お自慢顏に或宴會へ出席したところが、天下一品とほめるであらふと思つたら、紳士が口を揃へて下等(加藤)といつたには弱り入つたげな。』

十八、虎の皮

或軍人晩餐のお給仕の書生に對へ、最も古き最も趣味ある話を聞かすから、謹できけ。或る深林に一疋の猛虎が居た。其猛虎が深林生活に飽きたと見えて、里近き平野に散歩を試みたところが、對岸に體軀の大なる、而も異樣の駱駝が居て、天地は我物顏に野良〳〵して居るから、虎公心中大に驚き、身を潜めて駱駝の擧動を熟視して居たところが、同輩の最も年老た、駱駝や鼠抔を胴喝するので、彼等はみな縮あがる。其れを見ると不憫にもあり、面悄くもあり、駱駝の能は胴喝而已と、虎公が見て取たから、飛かゝつて一擊の下に斃さうとした。日常には進退遲鈍な駱駝も、逃げるときには仲々速

いけれども、虎には及ばぬ。遂に虎の爲に屈服した。此話は丁度今の戰爭に當て見ると、虎とは日本ぢや。鼠は朝鮮、年老た駱駝は支那、胴喝と逃げる外に能の無き駱駝は、露國ぢや。あの狀態で戰ふ力のなき淸國や、朝鮮を胴喝したから、功能もあつたけれども、我國と來たら駄目だ。功能は無い。戰を交へて見れば、連戰連敗の外、名の付やうが無い。海軍で窘られ。陸軍で敗られ。財政で困り。内亂で弱り果て、九死一生の國といつたら、露國より外にない。此分であらば終局の外交談判も、近き將來であらふ。たゞ心配になるは、先年のやうな失敗が無ければ宜いと思ふだけぢや。萬一一も十分の談判ができぬとしても、虎死して皮を留むるや。我軍の勇武と人道の爲に盡したることは、世界各國の人が敬愛するであらふ。』書生『如

何にも面白お話ですが。「虎死して皮を留む。豈偶然ならん」とは、水戸烈公の詩でありますが。虎死して死は緣起が惡い。私しが一つ言て見ませう。

　虎若し死なば皮を留む。ロスみな死して
　面の皮を殘す。

是で宜しふ御在ませう。虎の皮、面の皮、能く似て居ります。虎の皮は昔より、日本の大將方が愛用に成て居りますし。また世界の人も愛用します。ロスの面の皮は、ロスより外に愛用するものはありません。世界たゞロスのみです。』甲『ソリヤ可笑いナー。ロスは面の皮を何にするか。』乙『逃けて々々々逃げ遂られないで、捕虜となつた奴が、捕虜と成てもまた逃げる。逃げるを職分のやうに、心得て居る奴等の靴が、みな面の皮です。』

＊　＊　＊　＊　＊

十九、バルチック艦隊

奉天の大會戰に名譽の負傷をして、義眼義足を賜つて歸郷した勇士がある。其勇士の爲に村中の者が、慰勞の宴會を催した。集るもの二三百人。此村あつて已來、老若男女これほど集つたことが無いので、空前の大會ぢや。又此村あつて已來、これ程の名譽者を出したことも無い。恐く絶後のことであらふ。無論義眼義足の勇士が、此會の主賓である。其風采か神々しいと云ふ者あれば、さうでもあらふ、あの人の戰友が、みな靖國の神ぢやと、云ふ者きくもの、みな

無限の感にうたれて居る。平素なら酒を呑と、直ぐ世間話やら、歌やら太鼓やらで、騷ぐのは、大抵村人の通例であるが、如何したことか、此會ばかりは、みな沈着て、陰氣で、坐が引立ぬ。村老『諸君は餘りに眞面目に見うけられて、我々も氣乘りがせぬ。だから各自自由に語らふと、歌はふと、隨意氣任せに遣つたら、如何ですとの其聲に應じて、さう云はるゝのを、待つて居たのです、と、二人の若者、直樣席の中央に進み、大音あげて『トーザイ、トーザイ、唯今御目通りに控へさせましたのは、世界第一の手品師、ロス猪狐齋で御座ます。拙き技も御意に叶へましたら、千萬忝なき仕合で御座ます」と。紹介して席を退けば、殘る一人の若者が、徐ろに頭に被りし手巾を取れば、顏は眞黑に墨を塗り、兩つの目玉をぴか〳〵させるので、黑夜光珠の如く、頭ばかりなら盜賊が盜んで行くまいかと、危ふまるゝ程であつた。口を開へて云ふには、『私しはパリ九太夫が申上ました、猪狐齋で御在ます。私の十八番の大風呂敷の藝を、御覽に入れます」と懷中より取出した、一の風呂敷、『サア此で御座ます。此中には何物が御座ませう。みなさま當て御覽なさい。いや當てられては、私しの所作ことが無くなります」と。縱横無盡に振舞す。「如何です、大風呂敷を振舞す。昔からの手腕には、皆樣恐入るゝでせう。然し此大風呂敷の中に、バルチック艦隊があるのです。此風呂敷の結んだ口が、マラッカ海峽と思召せ。此卓上がサイゴン、カムラン、ホンコエあたりの支那海上と、御見倣し下されたし。サア此から、第二第三の艦隊を出します。』『ソリヤ出る、早や出る』と、

『斯く勢い好く、九太夫が囃立てますと、何物が出るかと思つて居る間が、興味があるので、殊に大風呂敷ですから、第二第三と續て出たら、立羽なものであらふとの御考へでせう。又早く見たいとの御注文もありませう。けれども今來る、早や來るといつて、出さぬところが價値です。だから風呂敷家は出すことを餘り好まぬのぢや。然し出すと申上げたら、出ざるを得ない。丁度ロ提督が東航を續けとの本國の訓令を受けたと、同樣で、私も心中吃驚仰天して居るのです。何故吃驚仰天するかと云ふに、左程關係のなきところで、擴げて居れば功能があるのだ。夫が東洋へ來れば、艦隊の眞相を人に知れて、不利益此上なし。其内日本艦隊に大風呂敷を見破られたら、其こそ龍宮世界か、松山へ行くより仕方がないから吃驚仰天、私も出して却て不興になるかと思つて、吃驚仰天、然し止を得ません。マラッカ海峽を通過させます。ソリャ囃せ』此時の囃立と云ふものは、バリ九太夫もあらん限りの秘術を盡して、囃立てたので、バルチック艦隊も東洋の海へ、ノッコリ顏出し致しました。『ソレ御覽、此通りとマッチの古箱四十四個、卓上に行列させました。日本の忠臣藏の復仇なら、四十七人でしたが、旅順の復仇が四十四といつては、到底助かりますまい。始終死ですから。然しこの艦隊が東洋へ顏出して、ノラ〳〵する有樣が、昔スペインのシドニア公が、凡そ三百年已前に百餘隻の艦隊を以て、英國を攻めんとして、リスボン港を出帆したる已來、世界は此樣な海上の壯觀を、見たことはありますまい。其長さ凡そ六哩ノラ〳〵して進航するは、威風を示さんと

のことだらふかと思つたら、其船底には蠣の附着して、而も舷側には海草が叢生して、快速力で進むことができないのである。又實際は戰鬪艦水雷艇を合して、十三隻、假裝巡洋艦四隻、これは獨乙の汽船二發の砲彈で、擊沈するに容易だそうな。こんな大風呂敷を支那海に張りて、媾和談判の材料に仕様の、何かは氣が利すぎて、間が拔て居る。是を海月艦隊、骨なし艦隊とも云いますが、我々が住居する家でも、一寸の風にも震動して、バリ〲云ふのをバリックと云ふ、海月艦隊が東郷艦隊に出遇つたら、砲口を開かぬさきから震動するので、私しは是をバリック艦隊と云へますと、四十四個のマッチの古箱を、兩手を以て揉つぶし。夫御覧なさい。否お聞なさい。バリック……。

二十、老兵士

今度召集に應じて、入營する四十前後の老兵士を、親戚の人が見舞つた。其時老兵士の話に、日本は建國已來、外國と戰を交へて一度も敗を取つたことはない。忠君愛國の至誠で戰ふから、日本は勇武で名高いけれども、日清の役には戰爭は勝利だつたが、三國の干涉に凹まされた。畢竟外交で敗を取つた。掌中の玉を失つたやうに、殘念で堪なんだ。其日本が失なつた玉を、泥棒で名高い露國が横奪て、知らぬ顏の半兵衛と極込だから。彌殘念で堪らん。其も推し忍堪て居たのだが。今度は日本と唇齒の關係のある朝鮮の方へ、長い手を出したのぢや。云はゞ唇に手をかけたで、白齒をむき出し、長手を

一捩り捩つたところが、十年已前失つた玉がコロリと日本へ戻つて來た。其で日本の胸の癪が下つたかと云へば、中々然で無い。今後長手を出さないやうに、叩付て々々と遣なければ承知はならん。

見舞人『佛國はナゼ手長の取持をするだらふ。鐵面皮で取持する氣が知れん。我々が佛國民なら取持どころの噪ぢやない。朱に交れば紅くなる。泥棒と仲間になれば、遂泥棒根性になる。然し科學の發達して居る國だから。紅くなら無い方法もあるか。不思議なことぢや。其から佛國の名物男と云へば、ナポレオンぢや。ナポレオンが居たらこそ、佛の名前が世界に行き渡つたのぢや。其名物男を凹した露國だから、天下に敵なしと自惚れて居る。ナポレオンの失敗が露軍の強きを保證したやうなものだから、手長も強氣になつたので、人をも殺され、國をも亡された者もある。若我々ならばナポレオンの敗戰は百年經つても、必ず忘れん。同盟どころか一度復仇してやるのが。ナポレオンの追善、世界の爲であつたのぢや。其れを他國の人が記憶して居ても、佛國の人が其樣ことがあつたか位では困る。否然う思はなければ、金も貸れず取持もならぬ。

老『サア然かと云へば、獨乙のことは、忘れないやうな風ぢや。だから獨乙も此には油斷をせぬとか。』

見『忘れるなら兩方共に忘れて仕舞ば宜のぢや。』

老『獨乙には土地を取られて居るから、慾で忘れぬ。』

見『手長の方は何故忘れた乎。』

老『其も斯うぢや。手長は貧乏だから、度々金を借るであらふ底で御機嫌をとるやら。お進物をするやら。全然小作人が親作を見舞やうにする者だから、氣持の宜のと、慾のために丸で忘れて、

仕舞つたのぢや。』見『では慾のために、目が暗むとは本當ぢや。今の中立違犯の仕打は盲目同然。』考『盲目同然とは余りひどいぢや無いか』見『親交ある我國を眼中におかないから、盲目同然と云ふのぢや。』考『君の言ふ盲目とは、如何盲目ぢや。』見『されば小說「露人の娘」にある、愛雲盲目と同然ぢや。

＊　＊　＊　＊　＊

二十一、長屋の敎育談

或長屋に、物知りと評判の高き男あり。本年十歳になる愛兒があるので、仲々敎育に注意して居る。毎日學校から愛兒が歸家と、色々の話しをして聞せるが、殆ど日課のやうになつて居る。或とき愛兒を膝下に呼寄せ。今日は面白き話しをして聞すから、忘れないやうに記憶て、居なけりやならぬ。或書の中に、三井寺の開山、智證大師の論語毛詩文選等を暗じたるは、十歳の時ぢやとあり。高雄の高辯は、亡父母の三途にあるか、天上界に在るかを念ふて、斷然群兒仲間の遊戯をやめて、專ら所業を勸めたは十歳の頃ぢや。林道春が人の太平記や、蒙求を讀むを聞て暗じたるは、八歳より十三歳の間ぢや、新井白石は十三歳にして土屋候贈答の文書代筆の役を爲し。賴山陽も亦十三歳にして述懷の詩を作り。また通鑑綱目をよみ。治亂の大勢を悟つたとか。源の爲朝は僅かに十三歳にして九州を領せんと欲し。三年にして悉く之を服從せしめ。十五歳の十月に九州總追捕使と稱し。二十餘回の大戰に、數十の城を陷ること。今の小兒

に、よく爲朝の勇に似たるものがあらふか。都芳門に苦戰して、首級二を得、戰破れて東國に奔らんとするや、自ら太刀を脱て、野盜二人を斬殺し。之を追ちらした頼朝は、十三歳の時であつた。十四歳より兵に將たる織田信長の如き、源の九郎義經の志を齎して、奥州に下りしは十六歳の時、一擧海の口の城を拔たる晴信の如きも、十六歳、ぢや有智子内親王は當時の文士と共に、嵯峨帝の花の宴に待し、立どころに七言律詩を作したるは十七歳の時、其詞の溫雅精妙なる男子が慚死せんけりやならぬ程である。頼政の兵を擧るや、十七歳の足利又太郎身を挺んで宇治川を渡り。平軍をして戰勝を歌はしめた、上杉景虎の義兵を出したは十八歳の時、平治の亂に單身敵の重圍の中にあつて、電奔雷激平軍と格鬪せる義平は、時に十九歳である。藤原頼道に寺門の北に向ふ、古例の有無を問れて空也上人の建られた、洛東の六波羅密寺、圓淵法師の道場なる震旦の西明寺は、みな北門なりと答へし大江匡房は、時に二十歳なりと書てある。汝も勉强して立派な人とならねばならぬと、幼き子供に話して居ると、隣の老女さん、壁越に聞て居て、饒舌たくて仕方がない。裏の飛石傳へに隣を訪い。イヤ何も先刻から坊ちあんへのお話。余り面白くて居堪ませんで、恐入りましたが、此所から伺ました。ヤア貴方の敎育に御熱心なこと。私も敎育には熱心なので御在まして、息子なんかも八歳で學校へやりまして、十二歳で尋常科を卒業致し。其から高等科へ入りまして、十六歳で而も優等で、卒業、其より中學に入りましたが、中學四年で大なる目的を立て、北海道へ行くと

言ますから、私しも一處に參りましたが、數年丹精した所詮があつて、數萬圓の金を貯へ。錦を着て故郷へ皈つたのですが、年齢から言ても自分の子ながら、余り人さんに耻入ることは無いと思つて居ましたが—、花に嵐しのたとへに洩れず、商業のために大損失を致して、今日は長屋住居の爲體ですけれども、近所の人々が可愛がつて、いつも質屋の使などに仕用て下さるので、身體の運動も自然と出來、御飯も旨くて而して達者で御在ます。男『然やらこそ、貴女を七億(質をく)老女とみなが言ます。實に長屋の名物、否世界の名物、貴女の尊(損)號。』女『私しは多年敎育熱心で、漸と七億位の尊號を得たのに、露國の如きは敎育が不熱心で、何して九十億の爵(借)を得たのでせう。

二十二、修學旅行の相談

或所に某醫學校の生徒、否未來の大博士の玉子が、三ッ四ッ(是は失敬)三四人お集りになりまして、お話が出來ました。其話に、昔は人命が輕くて、刑罰が重く。人情が殘忍で、戰爭が劇しく。人を截ること草の如くであつたが。解剖と云へば、肝を取るより外に用が無つた。爲に人間五尺の體内には、判明ぬことが澤山あつたやうだが。今となつては醫術も、又昔の醫術でない。吾々も何かして、解剖の實驗を致さうと思へど、馬の骨同然の奴でも、蛆虫の湧く骨と肉なれど、ウカと遣る譯にも行かず。實に小癪に障つて仕方が無いが。一ッそ疊の上に犬死にする穀つぶしより、靑鼻くつたらした絞罪人の

下され物より、戰地に赴きてロスの死體や、雨後の筍の如く、一戰毎にノコ々々出て來る捕虜の中、恰好の弱虫、五六疋申受けて、醫術研究の材料としたら、材料が新鮮なるだけ、其だけいよ〳〵以て珍の珍だ。君は何と思ふ乎。士『君の考へも宜が。筍と云ふ言だけは、止せ。吾輩は筍の藪のと云ふ言が、何處が何と云ふ譯もないが、何だか氣障りに成てならない。此氣障りが在ては、公平な話が出來ないから、已後は藪の筍のと云ふ言は、禁物ぢや。左なくては藪の相談、筍の議論と冷評せられては、天下に響く名論も、價値が無いやうになるで無いか。昨年開戰の際、帝國醫科大學の學生を選拔して、軍醫の助手と爲ると云ふ話しがあつたが。吾輩等は私立醫學の悲さには、其樣なことを言て吳れる人もなし。此方から進んで、修學旅行として、戰地へ行くのが得策は得策ぢやが、願つたところで。』

二『君の議論は何時も悲觀的で困る。筍が如斯の、藪が如斯のと言て居るが。僕の筍と言たより、君の話は最とも大なる筍ぢや。筍は大竹の幼き時代、大竹集つて千里の藪をなす。虎之に住む。虎公の得意思ふべしだ。其れは兎も角、願つて許可ないことはないぞ。筍笠の議員共を見たまへ。我利〳〵の餓鬼見たやうな連中ぢやが、彼等が戰地視察とか、何とか言て、自身の懷を肥す考ばかりして居る、奴等だが。戰地視察が許される。ところで皈朝て來て、待遇が宜の悪しのと、小言を言ふから、あの連中でも、目の明た人は斯言ふ待遇が、斯の彼のと言ふが、自身の懷を肥す外、國家の爲に何を戰地で視察したか、言て見らふと言はれて、赤面した向もある。其でも願さい

すりや許す。今吾々は戰地へ、修學の爲に旅行するのだから、許可せぬ譯はない。且つ又吾々は廢物を利用するので、燒けば灰、埋めば土、打捨をけは蛆虫、此樣厄介な廢物を利用して、吾々が研究の目的を達するばかりでない。天下後世を益するのだ。』ナ『マア許可する者としても、戰爭で負傷し、或は戰死した者を、醫學研究の材料にしては、慘酷ではあるまいか。』ニ『何の慘酷であるものか、敵將リチウツッチが日本の負傷兵は片端から刺殺せと、部下に命令したでは無いか。此だけ聞てさい慘酷の極だが、其が實地遣るのだから、身の毛が立つ。僕は生て居るのを殺すでない。然し政府が許さないと云へば、是非にと言ふにも及ばないが。僕は遠き將來に於て、博士請求の論文を提出するときは、醫學上より見たるロスの死骸と云

ふ論文だ。實は内地に居ても、大底は判明て居るが。フライに衣あり。學士に留學の色付ありで、僕の戰地へ修學旅行は、一種の色付を遣るのぢや。』ナ『君も仲々の大風呂敷家だ。大底判明て居る抔、僕は君の判明てる者は、御飯を暗黑で喰つても、鼻の穴へ詰込ぬだけ位ぢやと、思つて居るのだ。』ニ『サア大底判明てるぢや無いか。彼等は退却とか、何とか言つて、能く逃げ走るから、彼等が兩足は馬の足よりも速かだと、鑑定が付く。又彼等が將校や兵卒に、神經病者が多いと云ふから、余程腦が惡るいと考へられる。こゝに一大不思議のなは、戰死者も、捕虜も、負傷者も、將官も、兵卒も、みな臍が傷んで居るさうな。君等は理解るまいが。僕の考へは、日本と開戰したのを後悔して、臍を嚙だのだらふ。』

二十三、カイゼルとツアル

口は禍の門なら、其禍ひの門を勢よく出入して居るものは、カイゼルなり。爆裂彈は人を殺す危險物ぢやが。其危險物の中に、住居して居るが、ツアルなり。カイゼルは訂正打消に、日も足らず。ツアルは鎭壓々制に、寢食を忘る。ツアルが旅順を淸國より奪つたとき。カイゼルは膠州を竊に盜み。ツアル旅順を失なつたとき。カイゼル海州を盜まんと巧む。令評か滑稽か、將た肝膽相照すかは知ねども、太西洋の提督、謹んで太平洋の提督を送るなど、山の猿を捕へて、龍宮の王子となれと云ふか如く。本氣の沙汰とも思はれぬと、本人のお目出度がるには、仕方が無い。ツアル戰を繼續せんとして、詔

して曰く、我は世界列強の利益の爲に、太平洋の主人たらざるべからずと、言ふたは宜けれど、其國民が太平洋を知ぬので、太平洋とは農耕に適する、肥沃の土地で御在るかと。丁ゴック農民も、氣の毒なものなり。ツアルと猿と音が能く似て居るから。猿が木から落ると云ふのが。ツアルが木から落るとも聞え。猿が木から落るは、猿るの失敗。ツアルが木から落たは、開戰已來の陸軍の大失敗。ザルが艦から落ると聞けは、今までの海軍の戰敗に劫を煮して、自ら指揮したゆゑ。慣ぬことゝて過失て、海に落させたまへたやうにも聞ゆる。ザルが船から落るとは、漁夫が仕用する目無籠を、風が吹き落したか、滑つて落たか。兎に角、船から落たのぢや。此樣惡口言ふ人よりも、太平洋の提督など煽動る奴が、一番惡ひ。惡友は天

魔の使なりで、之を斥ける勇氣が無いなら、實に千害あつて、一利なし。敵國ながら氣の毒である。甲『君の耳も變だが、僕の耳も變だ。天蓋(千害)あつて一厘(一利)なしと聞いた。實に貧乏な虚無黨、否虚無僧ぢや。カイゼルの廻國を巡禮廻國と云ふから。』ツアルの虚無僧、妙な對照だ。然し轉でもたゞは起ぬ連中だ。』乙『たゞは起ぬ連中でも、今度こそは馬の糞も摑さぬ。畢竟骨折損の草臥收益として、やらねばならぬ。』甲『馬の糞も摑まさんとは、贅放ぢやが。骨折損の草臥收益が氣に入ぬ。僕ならば骨折損の草臥損ぢや。』

二十四、醫者と商人

或商人が日常出入する醫師の邸を訪ひ。商『久々にてお伺申しました。何ぞ御用も御座ませんか。』醫『否、最う時局に付て、萬事儉約目にせないと、井上さんあたりから、御目玉を頂戴せんけりやならぬ。だから別に用事もない』商『あの御方の吝な儉約論も、大分緩んで參りました。之も戰勝のお蔭で御在ませうが。井上御自身からが、最初から緩んで居るので、私し仲間の者共が、然う言ふて居ました。自身が儉約せないで、人に遣れと言つて居る氣が知れぬと。今では然言ふ人もなく。然する人もない。戰勝國の國民で、威風堂々、威張氣味です。』醫『だからの、井上さんは、醫者ばかり儉約せよと、言つたでも無からふし。又世間の人も、戰爭に勝たからとて、命がいらないと云ふ譯でも無からう。けれども兎角吾々の職業は、田舍で

は余程不景氣だよ。之も時局の爲だらふと、彼方が扣目だから、此方も扣目、汝も商賣を控目にしたら、何ぢや。』商『商賣を控目に致しますと。胃の腑に故障が起て來ます。だが最う暖氣に向いましたから、某所にコレラ發生、某港にペスト流行と、新聞に書てあります。特に柴棍はバ艦隊到着已來、恐敵病が發生したさうです。之からが貴下の御多忙の時機に入ます。隨つて御收入も莫大なものでありませう。』イ『然うか恐敵病が發生したか、餘も此頃の新聞に、バ艦隊の提督が神經症ぢやとか云ふであつたが、然でなからう。恐敵病だらふと思ふて居たが。果して然うか。余は豫想が當つた。此病は弱虫が全身に發生して、腰か拔る。誠に傳染しやすい者で、大抵の者はみな傳染る。其上提督は先頃東航を續けの訓令を受け。吃驚仰天したとき。兩の眼玉が飛出たので、慌てゝ之を嵌めたが。眼面を內方へ向けて、嵌めたのがあるので、其からと云ふものは、一眼は外物を視ることが、出來ぬばかりでなく。涙を內方へこぼす、重寶な人となつた。嗚呼、露國の忠臣も此病にかゝつた乎。』商『露人は軍さは、請負の如く思つて居る。自分の申付つた事だけ遣れば、敗ても勝つても、其で宜のぢや。ステッセルでも皇帝に對する、我任務終れりなど言たけな。然すれば軍は將官の請負仕事のやうだ。クロパトキンでも、總指揮官で在たときの給金を催促した。ロ提督でも同樣だらふ。何の忠臣と云ふことが在ます者か。』イ『汝の言ふのも一理はあるが。一體バ艦隊が出立したとき。ツアルが見送をした。其ときの言に、敵艦は全滅させよ。味方の艦は澤山ないから、一隻も傷ける

ことはならぬ。敵は一人も生すな。味方は一人も失ふなと言つたのぢや。斯様なことを陸軍へも、言ふたのであらふ。陸軍は非常な損害であるが。一人も生すな主義だけは、實行して居る。だから我軍の負傷兵が、横に斃れて居るのでも、刺殺すと云ふ悲惨なことを遣た。ロ提督は此ツアルの言た詔を聞て、征途に上り。勢いよくバルで腕試を遣つたが。英國から小言があつたので、申譯御座なく候で、逃た。此調子で東洋へ來たら、商船を臨檢する、砲擊する。なかなか酷く東洋の貿易を荒すだらふと、みんなが思ふて居たところが、東洋へ顔出し爲てと云ふものは、一隻も傷るな、一人も失ふな主義を實行せんとするやうだから、忠臣と云ふので、忠臣は孝子の門より出ると言て、親に孝なるものは君に忠ぢや。身體はみな、ことごとく親から貰つた物だから、毀傷せないが孝の始まり。ロ提督も艦隊を毀傷せぬのが、ツアルへの忠ぢや。命大切、艦隊大切と、佛國領水の間に、ブラ〳〵然として居るのであらふ。「南ソンナ忠なら、鼠のちうぢや。聽でギウの音も出ないやうになる。」其れでは忠孝の話が理解ぬやうだが。今度は汝の理解る話をする。柴棍では露の艦隊を、禰の神と言ふさうな。如何理由かと云ふに、佛人がロ提督に宿を貸し。旨く言丸めて、東洋まで引張て來た。すると日本が矢釜しく言ふので、佛の外相テカセルも始めの間は、踏張りて居たが、究竟板挾みとなつた。然なると首筋へ足をかけて、給養品を滅法もない價で賣附る。買ねばならぬ、買すとすれば人も艦も、不動の姿勢、否動くことがならぬ。だから盜賊の財布へ手を入て、掴出すと

同じくぢやから、底で福の神と云ふのであらふ。提督は内外を一時に視る重寶の眼だから。此際內外の狀態を察して、艦と人と、本國出立の儘で、我國へ引渡すであらふけれども、佛國程に利益らぬ。食客になる奴が澤山居るから。』『ロ我國の勇士は、靖國の神、廣瀨中佐は軍の神、バルチック艦隊は佛人の福の神、露人の爲には貧乏神、獨乙カイゼルは千手觀音何處へでも手を出すから)、兎角此世は神佛の世の中。』『イ神佛の世の中と云へば、結構ぢやが。其內容が泥棒と泥棒、かゝる中にも淸淨無垢なるば、我國の勇士、近頃ブレドリアで發見された、大金剛石の燦然たる光りも、恐くは及まいとの話、最中、妻君襖をあけて今のを話(ダイヤモンド)ですかと言つたので、主人亦指環のことかと思つて、狼狽氣味で、いゝや意匠(醫商)の話。』

二十五、露語研究

同じ言でも付處に依て意味が違ふ。火葬場附近のお茶屋なんかで、お近い內にと云はれたら、お世辭とは思はれない、毒を吹れたと感付ねばならぬ。いや氣持が惡い。上野の精養軒や、芝の香雪あたりで、何卒お近內にと言れたならば、成程お茶代が家の女將の氣に入つたか知らんと、急に肩が昇る。同じ一番の言でも、學校なんどで下から一番と云はるゝものは、弱虫、金喰虫、脛嚙りの異名の樣に思はれる。其弱虫、金喰虫、脛嚙りも、又落第生の異名ぢや。すると下から一番とは、異名の異名で、この異名も、半年や一年では、得られぬ。其一番先生故鄕へ歸れば、眞面目に書齋に入つて、勉學の體を粧ひ。

出ては口角泡を飛し。』雄辯壯語、なか〳〵達者な者で、家内の親戚云ふまでもない、時としては朋友も皆吹飛さるゝ。マア故郷で強くて、學校で弱く。教科書に向へば澁り勝だが。小説なんかには立板に水。同氣相求むるか肝膽片照ずか知らぬが、甲の一番先生、乙の一番先生を訪ふた。甲君は此頃僕の宅へ來ないぜ。頻りと勉強か。』乙『何に勉強と云ふ理由でも無いが、露語の研究にかゝつたから、忙くて遂お尋ね申さんのぢや。』甲『露語の研究、ソリや妙ぢや。僕は毎度君に機先を制せられて困る。又君の成功しないにも呆れる。』乙『君だつて成功したものがあるか。俚諺正調、一等が一圓あたるからつて、學校を休んでかゝつたが、一度も出ないだから、燒芋一度奢應たが、お負に郵劵が無いの、はがきが無いのと言て、俚諺正調、落第の手

傳をさせられて、僕こそ困り入たよ。』甲『あれは斯ふぢや、理由を聞ないから然う思ふも、無理でないが、實に僕の分が紙上に出ないから、一度照會て見た處が、其樣なはがきは到着しないとのことで在たから、其では僕の金玉の原稿を、郵便配達夫に盗れたのだらうと思つて居ると、其後四五日續て出た。』乙『其樣な胡魔化しは、御免だよ。』甲『何爲胡魔化すものか。僕の言ふた通り、出しては剽窃であるから、句は少々添削してあるが、マア大同小異だ。僕も惜くて堪らんから、後來は自身で、五つも七つも、持て行き。一度に五圓も七圓も取るから、其時こそは、はがき代やら何かで饗應から、今暫時待たまへ。間髪を入れずだ。』乙『山の芋が鰻になる。淫亂虫が大臣になる。君の駄句が金になる。是も時局だ盲從々々。』甲『穢ひところを

掘くると蚯蚓が出る。君だつて然でないか。懸賞小說、幾度書たか知らぬが、一度も出ない。僕の俚諺正調は、朝飯前に十句も讀めるか、君は三十日かゝつて、半篇も出來ぬ。而して落第ばかりぢやから堪つたものでない。能くも命が在たものだ。夫にも懲ず露語の研究。何たる愚な話であらふか。外國語でも、英佛獨なら彼國の書を讀み、彼國の學者と交り。我に益するところ甚だ多し。我國今日の狀態は、彼等が長を採て我の短を補ふたのぢや。露の如きは殆んと彼に學ぶ處なし。其も其筈、彼は蠻國ぢや。世界第一の蠻國ぢや。何時ぞや、内務省に露の何とか云ふ書を反譯して、出版した。ソリャ新聞に、雜誌に、手強く攻擊せられて、三日月さまなら何分間は見られるが、彼書ばかりは出る引込む。其早さはマゴ〱して居るものは、出たのか出ぬのか分らぬ位であつた。』乙『僕が露語を學ぶは、かれが蠻書を讀んで、我國を益するの、かれが專制政治が氣に入るのと、云ふ譯ではない、目下戰爭最中、彈丸彈藥の外、必要なものは露語だらふ。だから露語を學んで、通譯官位になり度と思ふのだ。

甲『然うか、君の勉强のために、戰爭は長引ない。君が露語に成功する時分は、戰爭は終局ぢや。さうすると六日の菖蒲、十日の菊、三年無駄骨折の君が、露語萬に一も採用試驗を願たら、例のお極り――。』父『之を聞て大に怒り。君は余りに家の息を虐めるが、今度は落第は爲せない。』甲『落第させぬとは、何するのです。』父『採用試驗を受ぬのぢや。』

二十六、居候

或家の天保老人、毎夜按摩を呼び。身體を摩擦せながら、話相手にするので、偶には按摩より聞くこともあれど、多くは自分が聞かすのぢや。此頃のことであつたが、按摩を相手に居候の話が始つた。其話に今の青年が、某が許に食客をして居たなど、恥入もせずに横柄に話すが、食客とは居候のことだよ。居候と云ふものは、國元では金喰虫、脛嚙りと云はるゝ奴で、而して學問は生嚙りだが、能く人の膝を嚙る。三杯目にソツト出す奴は舊式で、三杯目どころか、五杯目でもソツト出さす。何故食客と云はないかと、女中にお目玉を呉れ。運動に米を搗ぬ。此等の連中をハイカラ居候とでも云ふか。

然し此居候も主人が好くから集る。集るから多くなる。支那の孟嘗君とか云ふ人の居候は、三千人も居つたげな。中には鷄りの眞似をする奴、狗の眞似をする奴、いろ〳〵の者が居た。按『貴下のお話はいつも生々して居るので、斯な短夜の時分でも、睡氣がさしません。然し、私し共の目から見ますと、オツト目から見えねど、日本政府は、居候が好きだと云ふ譯でも在ますまいけれども、戰場から來る居候は、なか〳〵莫大なもので、差引しても殘餘六七萬位は居るでせう。狗の眞似をして、油を舐るとか。猫の眞似して、鼠を捕るか。ドンチアン〳〵と噪ぎ立る。女郎買をする。藝者の落籍の相談にかゝる。言語道斷、自駄羅苦千萬、其上濱寺とかに居る奴は、旅順から來た奴で名譽の捕虜だの、高等居候だのと言て居るさうですが。

「日本をば喰つぶす氣で、居候」と洒落て居るのでは御在ますまいか。』老『あれは最初捕虜と云たもので、生た奴を捕へて來るとか、降服するといふ奴等を內地へ送るので、其が內地へ來ると、居候となるのだ。』若『生た奴なら、魚でも五萬も六萬も捕るには、骨が折ます。況して逃る秘術を極めて居る、ロスのことだから、仲々骨が折たで御在ませう。』老『思ふた程でもない。大砲二三發打出すと、直ぐ腰が抜る。夫から逃げて逃げて、腰の抜る奴もある。其奴を捕るのだから、造作が無いさうな。また死だ奴や、半死半生の奴を遺棄して逃るから、是又此方で拾ふて、死體は埋め。負傷は病院へ入れる。』若『名譽の捕虜、名譽の戰死、名譽の負傷と、露國では言て居ませうか。』老『ソリヤ、露西亞では言ふて居るに違ひない。ポツタデツキと云ふ居候が居る。此奴の妻が、カツトリツカと云ふ。先頃上海から來て、今では其夫と共に借宅して、樂しく暮して居るところから、露の本國では、名譽の戰死者よりも名高いは、ポツタデツキ捕虜第一の果報ものと云ふから、他の捕虜は名譽の捕虜よりも、果報捕虜になりたいと、寢言を云つて居るげな。』

* * * *

二十七、韓臣股をくゞる

大奸は忠臣に似たりとは、大奸が忠臣の假面を被るからぢや。大韓は朝鮮に似たりとは、朝鮮と云へしを改めて、大韓と云へばとて、野良苦良して未開化なることは、少も變つたことが無いとの意味で

ある。又朝鮮は滿洲より小さしと云へば、格別小國のやうにも思はれないが、朝鮮は饅頭より小さしと云へば、至極の小國となる。兆千は文字を變れば、萬十よりも大なりと云はねはならぬ。又大韓は忠臣に似たりと云へば、日本の屬國でなければ、保護國たることが思はるゝ、先頃も祝勝大使が、日本へ來朝することゝなつたところが、副使を付すれば、日本の屬國らしいと、去年の暦見たやうな、ことを言つた。大寒(韓)小寒(官)も在たげな。話頭一轉、大使お皈りに西京へ立寄り、藝者の舞を御覽になつて、お名前の如く義理で、陽氣になられたのかと思つたら、眞實に陽氣にならせられたのであつた。大韓の小官等は、此陽氣に乘つて逆上たが、日本與しやすしと、途方もなき惡き了簡を起した。兎角韓臣は股をくゞるので、清人の股をくゞる。露人の股をくゞる。日本人の股をくゞる。皇帝の股をくゞる。狙ふところ睪丸にあり。否金の玉なり。けれども清人は馬蹄あつて、金玉なしだから、野良〳〵して自國の滅亡を覺らず。皇帝は馬蹄もなければ、牛チンも無い。露人は恫喝で行かねば、大風呂敷、其れでゆかねば、大なる金の王をブラ下る。股をくゞるの連中は、彌以て股くゞる。日清の戰役も、今回の戰爭も、彼等が露清の股をくゞるから起るので、如斯くだら(百濟)ないことを、度々やられては、こま(高麗)る早速日本の保護國となれ。從來の戰費を決算したら兎ても算堪(三韓)は立たぬ。然せないと、國民に申譯がないと云ふ處から、何國の人の股をも、くゞることの出來ないやうに、朝鮮のお足を縛り上た。果なるほど、其で京釜鐵道が出來たのですか。

然し朝鮮は小國なれども、あれ位では、足を動かさずには旅行まい。』

乙『其だから、朝鮮全國は日本のお足(日本の通貨)が、用に立つのぢや。』

＊　＊　＊　＊

二十八、内しやう話

光陰は矢の如しとは、昔のこと。今は其樣なことを、強て言ふとすれば、光陰は鐵砲丸の如しとでも言ふか、いつの間にか、春も行き、花も散り、若葉青葉の頃となり。日増に暑さが加わるので、自然と睡氣がさす。精神が家屋の如きものゝ中にあるならば、七つの窓は五つまでも、閉たかのやうである。先づ朝早く起床し、洗面して後、手に觸るゝに隨つて新聞を讀むが、此上もなき樂みとして居る。奉

天大戰の頃、靖國大祭の時などの新聞は、字々紙上に躍り。一句讀終れば、覺へず案を打ち。一面讀み終れば、手の舞ひ足の踏む處を知ぬ。だから惜くて、一時に讀盡すことが出來ぬ。否讀盡したならば、明日の新聞を讀まで、一日千秋の思をせねばならぬ。恰も喰かけた御飯を、横取に逢つたかのやうな氣待がする。けれども又讀ずに居られぬ。殆んど狂氣の如く、其も其の筈、千古未曾有の大戰、日本あつて已來の大祭ぢやから、其がいつの間にか濟んで仕舞つた。其後の新聞は紙上活氣が拔け。聊か物足ぬ心地がする。是は今年に限らぬ。毎年も此頃は如何云ふ譯か、活氣が無いのだ。今年は尚更然う思はれる。新聞も睡氣がさすか知らんと、奇妙變哲な考を起して居たら。吉川殿が處々方々で、味を遣れるので、忽ち新聞紙上に

花が咲かけた。底で國民一同、殊に出征軍人の家族は、時もあらふにあの毛碌がと、大きな目玉をむき出して、讀で居ると、今度は腰拔艦隊が、ソロ〳〵遣て來たで、又一つ新聞紙上に花が咲た。サア如斯なつて來ると、海戰のために、新聞紙上が賑ふから、吉川の話が內しやうになるかと思つて、案じられる。甲『君は朝飯前から、何をクド〳〵獨り小言を言つて居るのだ。吉川の話は內相にならねば宜いなど、一體其は何のこつたい。君ば美人の挿畫を覗込での獨言怪いナー、其美人は吉川と云ふのかい。』乙『オ、君か、僕は何を言て居たかい。』甲『秘さなくても宜ぢやないか、吉川と口走つて居た。其美人のことであらう。』乙『ソフ邪推されては困るが、實は吉川とは、秋正先生のことだ。アノ先生が、何を視察に出掛たのか知らぬが、

到る處醜聞山の如く。吉川內務大臣の淫行抔、新聞に書立てある。其中彼れが最も目尻を下げ、涎を流し、鼻の下を奇妙に長くした奴が、此美人阿絹と云ふのぢや。君考へて見たまへ、露國の內相などは、內亂外寇の局に當り、實に玉の汗を流して居るであらう。我國の內相は、か〻る戰時に放蕩三昧とは、何たる不心得であらふか。忠勇なる將卒が一身を犧牲にしたればこそ、國家を泰山の安きに置くのぢや。其勇士に對し、家族に對し、其職責を忘れて居る、彼を戰爭に打紛れて內相ですまされて、堪るものか。』甲『あのお手本は、伊藤侯だらふか。井上伯だらふか。』乙『なか〳〵伊藤侯が手本になるもので無い。伊藤侯はやるはやるが、詩人的の風流氣があつて、時としては詩を作る、或時は藝者の影を襖に映して、墨を塗つて嬉が

る。吉川と來ては目尻を下げ、涎を流し、義大夫を唸るは、上乘ちや。此外、糞威張に威張散し。お上便所など云ふ張紙させ。僭上の仕打、少からずださうな。』甲『僭上と云へば云ふもの丶、宿屋の亭主が書き誤つたのであらふ。おかみ便所と書たら宜のだ、何故かと云ふに待合の女主を、おかみと云ふでないか、だからおかみ便所とは、女主便所で、家の女主が專用の便所を吉川の用に供するのだ。何にせよ、女郎臭奴ぢや。此話は兎ても内相にしてをけぬ。是非公然二人で、談判に行く。ことに據たら鐵掌丸の如く喰して遣ると。相談一決、間髪を入れざるとき。號外の一聲に氣を奪れ、手早く取て之を見るに、バルチック艦隊全滅とあつたから。萬歳を唱へかゝる、目出度幸先に、内相を交迭させるやうでは、敵國に對して面白くないから、止たら如何だ。』乙『ソリャ見たか、内相の話は眞の内しやう話になつた。』

* * * * *

二十九、ビリレフ提督と艦

古今未曾有の大戰は、東亞の新進國と西歐の強大國とに據て、開始せられ。奉天の會戰は地下のナポレオンも舌を巻き。對島海峽の海戰はネルソンも、後世恐るべしと驚歎したであらう。此戰爭によつて兩交戰國に現はれた奇なる現象を、一ツ二ツ言て見やう。先露國では兵隊は、同盟罷工者に向つては、仲々強い。何時も勝を制して居るが。極東の戰場では、如何なる場合も、勝たることはない。遂、

に日本人が一度敗た、號外を見たいと洒落るほど、敗つゞけ。海軍はと云へば、軍艦の勢揃だけは、美事なものだが、敗を取るも立派だ。又他國の領土を盗むなら、一寸でも取ると云ふ、極悪の吝坊なれど、自國の軍艦を捨るには、捨惜をせんやうである。丁度賭博打が敗を取りたるとき、衣服一切の物を賣飛して、眞裸體となり。恬として恥ざると、能く似て居る。又冬宮の一發、セルジス大公の暗殺、ウフア總督、ソコロヴスキーワルソウ總督、アキシモヴキッチは爆烈彈を投附られ。此種のことが平時よりも多く成た、かのやうに見える。其に又同盟罷工、是も仲々區域が廣くて、全國一致と言ても虚言で無い。又財政に非常に窮し。佛人に頭を下ること、零度以下、一度下ては又上り、上ては又下げと云ふ工合だが。上ても下ても、いつも零度以下での上げ下げだ。强國の名は大敗の爲に消滅して、大國と云ふ名だけ殘つたが、裏店と云ふ忌々しき文字を、大國の頭に冠ることになつた。又中立違犯をしば〳〵遣るが、自分の中立違犯を棚へ上げ、却つて日本が中立違犯を遣るなどゝ、清廷へ持かける。他國ならば陸海軍に敗を取り、窮して盲目滅法を遣るのだと、最も少量な同情もなきに非ずだが、露國と聞ては平時が盲目滅法だから、理由の理解ぬことをするものを、露國流だと云はれて居るから、最も少量の同情どころか、殺人囚が監獄で殺人を企て、窃盗囚が監獄で窃盗するかの如く、思はれて、かゝる國家多事の場合、乃ち逆境に立ながら、あの根性が止ないかと、世界の人に思はせるのが、最も奇なる現象だらふ。直君は仲々の露國通だが、僕は日本

通、否日本の側を言て見やうが。日本は陸海共に連戰連勝、八百長遣ても如斯旨くは行ぬものだか、不思議と云へば云ふもの〻、不思議なことは何にもない、我將卒の勇武なることが、彼國より數等高きに居るからだ。夫から擧國一致と云ふことは、裏店住居の貧民も洩れぬ。財政と來たら、桂さんでも、曾禰さんでも、なか〳〵男が上つた。普佛戰爭の當時に比較すれば、日本公債募集の何時も好況なることは、普のビスマーク公も、佛のガンベツタ氏も、地下で伯等の手腕には、恐入たと云ふて居るだらふ。平時は利益を爭ふて、犬猿もたゞならざる政黨でさい。協同一致して盲從して居る。斯なことは話す價値も無いやうだ。けれども、「時局だから盲從」と云ふ言を、全國に流行させた元祖だから、一寸云ふべき價値がある。夫に井上伯の儉約論、大俗物金森が吝嗇說、之に盲從說を加味して、日常の食事も、親戚間の贈答も、兒童の敎育も、戰場に立つ兵士の給養品も、彈丸も、儉約論や吝嗇說の範圍內かと思つたら、兵士の給養品や、彈丸は其以外ぢやさうな。之をも儉約と云はなんだが、不思議な位ぢや。か〻る愚論は國民は、おそらく記憶して居るまい。然し奇異に感ずるは、伊藤侯ぢや、平時は侯の言動が人の注目を引き。新聞界を賑すが。戰時となつても、同じくちやけれども、種が違ふ。開戰當時侯の意氣込は、なか〳〵鋭ひ。內閣大臣を最も〳〵下目に見て、今度が今度まで、外交は乃公を除きて他に人なしと、飲だときも飲ざるときも、大氣焰を吐て居たが。英雄は時勢の寵兒、かれを愛する時勢がすぎて、聊かなる惰力に據て、自家の位置を、

保つて居ることを悟つたのであらふか、近來眞面目くさつたは。可笑。侯でさい如斯ぢや。其に吉川なんぞが淫行三昧、捕虜將校をお手本にした、戰勝國の大官ありと聞ては、露國の腑なら嚙んで負傷して居るから、西國するにも難儀だが、日本の腑は負傷がないから、直ぐ西國する。』夫『君旨物の中の砂、泥中の蓮と云ふことがある。セルジ大公を暗殺した刺客が、余は罪人でない。吾黨は今革命に從事したのぢや。余は偶ま捕虜となつた。又曰く、余は白晝公然我が敵手を斃した。公等余を斃す。亦斯如すれば宜いのぢやと。彼れは政府の存在を否認し。劍を把て壓制政府の代理者と戰ふ。此時に當つて其敵を斃すは、是交戰者の權利なり。暗殺に非ざるなり。かれは罪あるが故に、捕れたのでない。戰敗れ力ら足らなんだから、捕れたのだと言て居る。吾々でさい痛快の情、禁ずることができぬ。暗黑一點張の露國にも、かゝる痛快なる勇士がある。乃ち泥中の蓮ぢや。我國はすべて順境、何一つ申分なきことながら、吉川に飛だ眞似をせられたので、國民に不快の念を起させたは、旨物の中の砂、新體詩にでも遣たら、好對ができる。』吉『其も好對句になるかも知らぬが、其よりも一層妙な現象がある。力士大泉が年寄千賀の浦を襲名したら、利根川以下が分離したので、獨り年寄との評判がある。露のピリレフは獨立權を有せる、太平洋艦隊の司令官に任せられ。浦港へ向け本國から、出發したまでは宜かつたが、其艦が東鄕提督に打毀されて、全滅したので、艦なしの司令官、東鄕提督、武士は情と思つたか、海底權だけは許したさうな。』

三十、號外

勇しく號外と遣つて來たので、吃驚した。否、吃驚した位でない。魂消た。何で魂消た。突飛にやられたで、魂消た。彼方は突飛でも何でもないのぢや。此方が居眠をして居たからだ。一寸と胡亂付て、マゴ〱したが、馬鹿目と親爺に叱られたので、漸と本氣になつて、號外を讀んだ。自分ながらも自分の呑氣に、吃驚した。敵艦の全滅、敵提督の捕虜、ネルソン以上の大成功と云ふのに吃驚した。我國は帝國萬歲と歡喜の聲で、震動する。全世界は賞讚の聲で、震動する。露國は頭痛鉢卷で、涙を流す。此狀態を撮影したら、日本は笑ふ、露國は泣く、世界は之を賞讚する。泣くのを賞讚するか、笑ふのを

賞讚するか、頓と判明ぬやうだが、泣くのも、笑ふのも、賞讚するでない、戰爭の目的は勝敗ぢやで、巧妙な手段を以て、勇敢に敵を破りたるものを賞讚するので、笑ふと泣くは目的以外の副產物だらふ。我國民が笑ふだけ、夫だけ否、夫だけ位でない。夫に幾個も々々辶をかけて、露國民は泣くのぢや。否露國民は泣かぬ。ツアル自身が泣くのぢやと、他人の多忙のも顧みず、大氣焔を吐て居る、男あり。

大吉」何程何でも、ツアルが泣くものか。ツアルは赫として怒り。必ず陸海軍の總指揮官となつて、お近内に出陣するだらふ。其だけの度胸がなければ、あんな野蠻な國のお頭と成て居られるものか。』

小川」ツアルに出陣の意志があつても、皇后は必ず之に故障を入るゝ。何故かと云ふに、ツアルが日本に巡遊せられたとき、御召になつた

艦も、東郷が今度打毀しました。又支那には玄弉三藏、日本には津田三藏が居りますから。危ふ御在ますと。急度お止なさるに違ひ無い。』大『君は頗る奇言を吐くが、本氣になつて皇后がお止なさる理由を言て見よ。』小『然か、そんなら言て見やうか、然し僕は皇后さんの假聲は、旨はやられないから、意志だけ言て見よ。先づ斯ぢや。貴方が出陣すると、仰出しになると、臣下が其用意にかゝります。其用意半ばに、ハルビンが敗れて仕舞ます。考へて御覧。スクリドロフが旅順へ著たか著ないに、旅順艦隊が敗北しました。ビリレフが浦港への途中で、バルチック艦隊が全滅しました。一度あることは二度、二度あることは四度、オツト三度ぢや。サアツアルの意志を言て見たまへ。』大『其時には、ツアルは斯言ふだらふ。殘念〳〵、大國の君主を日本が凹ました。世界に面目がない。日本は大惡魔ぢや、これで何ぢや。』小『日本は大惡魔で御座ません。正義で而も親切ぢやと、多數の捕虜が言て寄越しますから、貴方も速かに降服なさいと、是位のことは仰るだらふ。』小『然すると、ツアルは神よ、我皇室を守らせたまへかナー。』大『神は我皇室を守らせたまうから、降服をお勸め申すのであります。降服は神意です。』小『我皇室を守らせたまう神が、降服せよと言るゝものか。』大『冬宮の一發を御覧なさい。あれが神意です。貴方も强情ですから、神が實地に見せたまへた一發です。我兵の砲擊の不味さ加減が、あれで判明するでせう。あんな手合が、精鋭無二の日本兵と戰つたとて、駄目ですから。降服せよとの神意最早疑ふ餘地はありません。又能く思つて見ますと、百發百

中と云ふ手腕であつたならば、日本には敗ないが、貴方のお命はないのです。總體〆て降服は神意でありますと、例の世界洪水の時の雨の如く、涙を流して而も、バルチック艦隊全滅の時の砲聲の如き、聲を放つて泣くのぢや。』小『然なる場合は、日本なら泣く子と、地頭には勝れないと云ふが、露國だから、何云ふか知らないが、一つ當て見よか。泣く子と、泣く女房には勝れないでい不可ないが。然し降服するとすれば、其手續は何するのぢや。』大『勉強は降服(幸福)を生む母』だと云ふから、勉強から降服がでるので、勉強しないと降服が生れぬ。だから教會堂の鐘をガボン〳〵と打叩くと、國民が一勢にアーメンと噪ぎ立てる。恰も葬式の如き手續ぢや。』小『勉強して降服すると云ふは變ぢや、大勉強して降服すると云ふは、露國で云へば無理往生するのぢや。』

* × * * *

三十一、名譽の負傷

戰爭と云ふものは悲慘なもので、敵も味方も、一身を犧牲とせんければならぬ。同じく戰死、同じく負傷、皆名譽の文字と、勳と功との等級を冠るものがあるであらふ。實に死して恨なしぢや。けれども戰敗と戰勝との間だに、大なる段階があるやに思はる。戰勝は國威を海外に宣揚し。戰敗は威信を國内にすら失墜す。だから獨乙皇帝が、我乃木將軍と露のステッセル將軍に、プールルーメリット勳章を贈與られたが。勳章に二つの意味があるまいが。乃木將軍の胸

間に輝く光りと、ステッセル將軍の胸間に輝く光りとは、大いに違ふて居る、かのやうな感じがする。他國から贈與つた物でさい、如斯ぢや。況んや戰敗國の皇帝が、其軍隊の將士に授ける勳章は、手前味噌でなければ、樂屋の手賞讃でなからふかと、思はるだから、戰となつたら腕の續くだけ遣ねばならぬ。戰勝の餘光の及ぶところ、其區域甚だ廣く。先づ外にしては我國人が、支那人の一部と見誤られ。或は全然、我國を知らなんだ、外人もあつたが。今度の戰勝に據て、初めて知り。而も世界の強國たることを、初めて知りたる人も少くない。我帝國の價値は、忘れて貰ひ度と言たとて、肝に銘じた外人は、兎ても忘れて吳れはせまい。又內にしては何かと云ふに、名譽の戰死にはなけれど、名譽の負傷者には僞物がある。名

譽の負傷者に僞物のあるは、名譽の負傷が何れの方面に於ても、非常に巾が利からだ。』其『先生、名譽負傷者の僞物が出來ては、厄介千萬、餘も西南の役に名譽の負傷をしたものですが、今日まで僞物のあることを存せなんだ。日露の戰爭は西南の役とは、舞臺が違ふから、名譽の負傷も種々でせうが、名譽も又一層名譽だ。斯る勇士の僞物があつては、國家の體面を汚す、一大汚點ぢや。早く豫防しないと不可ぬ。深川のペストのやうに、續々發生せぬやうにするが、肝要ではありますまいか。』先『仰の通り西南の役とは舞臺が違ふから、負傷者も一層名譽なのですだから、名譽だけ僞物ができる。又負傷も種々で、僞物も出來やすい。先年西京の香具師が、梅毒で額に穴の生た。田舍の片輪ものを欺し込み。其穴に義眼を嵌め、源の賴光

を威嚇した、蜘蛛の化に二つ餘る、人間には一つ餘ると云ふ、奇妙奇體なものとして、先づ出來上つたから、前祝として祇園で一杯始めました、ところが一杯々々、又一杯と、醉がまわるに隨つて、例の男が正面の義眼に貼つて居た、膏藥をいつの間にか剝したので、饅頭大の一眼炯々として、恰も黒雲を破つて、太陽がノツコリ顏を出されたかの如くであつたから、一坐の藝者連中も、キヤツと叫んで、大噪ぎしたと云ふことが御在ます。是等は自分の不名譽なる點を利用して、利益ごとにかゝると云ふ、極卑劣なのだが。今の僞物と云ふは、餘程高尚なので、書畵の僞物ならば、八九分と云ふところまで行て居るので、生付の跛も或場合は、名譽の負傷で通るのぢや。私しが先日或所へ參りました。來合して居た、見慣れぬ男が居るから、何樣で御在ますと伺つたら、其男の云ふには、私しこそは旅順背面攻擊に參加して、名譽の負傷した勳藤當と申すものですと云ふ、音聲が何となく濁つて聞ゆるので、何處を負傷なさいましたかと、折返してたづねますと、かれは平然として鼻です。二龍山の戰に黃金山の砲臺より打出す砲彈の破片、飛來りて大事の々々々鼻の穴の掩蓋を、打破り。男を下げましたが、難有ことには唯今の鼻は、恩賜の鼻です。然し肉色が赤すぎて、少々困り入ますと、いふから、御名譽のことです。然し是まで名譽の負傷者には、義眼義足義手の恩賜のあつたことは、新聞で能く承知して居ますが、義鼻を賜つたと云ふことは、余り聞きません。否皆無ですと、強く推し返すと、例の男の云ふには、義鼻を賜つたは私しが嚆矢です。否其れに

しても、怪しい。定めて名譽の負傷も、僞物だらふ、恩賜の鼻も僞物だらふ、義鼻の義の字が違ふてないかと、憎れ口を言たので、彼男の云ふには、實は私しが何處で鼻を落したか知らないが、鼻を落したのが實際なので、手細工で鼻を製造ひ、肉色が赤くなりすぎて、不體裁だが、名譽の負傷と僞り、恩賜の義鼻と稱て、人の耳目を晤して來た。否晤した意であつたのぢや。今貴下に化の皮を剝れて、困つたが。然し私しは手細工鼻の鼻祖でせうと。泣ん許りに云へますから、私しも氣の毒で堪りませんで、鼻赤(甚だ)濟みませんと、詫びました。』

三十二、紀念碑

或先生、村民を共に綠蔭深處に地を相して、同村出身の戰死者の爲に、一の紀念碑を建べく企てた。其理由を村民に話すには、昔は一將功成つて萬骨枯ると言て、戰爭は極めて悲慘なもので、其悲慘なものを敢てするは、何の爲だか判明ぬ位で、國家の爲と云ふよりも、一將の利慾から割出す戰爭が多く、實に萬骨枯るであつた。今の戰爭は國家の爲だ。帝國の興廢にかゝるのぢや。だから一將功なると共に、萬骨又活る。生て新平と冷遇せらるゝものも、死しては靖國の神と尊敬るゝ、何と萬骨活ぢや。無らふか。よつて我々も勇士の英魂を弔ひ。芳名永く千載に傳へんとの、微意より外ないのぢや。

が、其裏面には昨年開戰以來、戰死した勇士の葬儀に、弔詞を讀む人が少ないが、其文中に君其れ瞑せよ。々々々々々々とやるから。如何も不審に堪ない。楠は七度死じて七度生れ。英魂永く皇城を護らんと。楠氏に限らず、勇士はすべて如斯で、死して直樣瞑目する腰拔があるものか。皆な英魂は永く帝國を護るぢや。然るに瞑せよと頻りにやるから、其人物を注意して見ると、軍人の弔詞にはないやうだが。縣會議員とか、市會議員とか、郡會議員とか、みな盲從連の片破ぢや。其れが千篇一律であるから、考へて見ると、成程對手の不始末を默許すると云ふ場合に、邦人は此やうなことを云ふ、其邊は目を瞑してと、遼東半島還付のときも、戰爭は大勝利であつたが。外交は大敗地下の勇士が、血を流し、骨を曝して得たる結果を、水泡にするとは、情ない。話しだけれども、仕方がないから、目を瞑してやつた。然るに今回も勇士の靈前に、プル／＼と手と聲を振はせて、哀願するやうに、君其れ瞑せよをやるから、古今未曾有の大勝だが、外交となつてお頭が不始末をやつたとき。勇士が眼をムキ出して居ては、都合惡しと思つて居るか、或は其場合は、君其れ目を瞑して呉れとの、前提ではなからふかと案じられるが。今度は瞑目どころか。一層大なる眼玉をムキ出して、外交談判を監視して貰はねばならぬ。沖の島には燈臺を建設して、是を東郷燈臺と命名し。永く對島海峽を照し。光輝を萬世に放つとか。余も又此紀念碑を建設して、地下の勇士をして、東郷燈臺の光よりも、無限の眼光を放ちて、外交談判を監視して貰ふと思ふ。村先生誠に宜き思

付です。是非然せんけりやなりません。其構造は如何なされるのです。』先『其構造は大理石にして、高さ十丈、奈良の大佛の眼玉に、五倍も十倍も、大きな眼玉二個。村『其は如何云ふ意味か、我々には理解ませんが。或賣藥家の軒端に、目藥の看板を出してあつた。其看板に眼玉兩つの下に、藥の字を書たのがありました。すると此看板に鼻がないから、梅毒の藥と感違を致したものがある。今も此紀念碑を見て、目藥の看板と間違ますまいか。』先『其れも然うだが、余の考へは、子胥と云ふ豪傑が、國王か敵の術中に陷り、自分も思はぬ禍にかゝり。將に死せんとするとき、國を思ふてではなからふ、大方腹立紛れたらふが、斯云ふた、我眼を抉り、之を東門に掲げよ。敵兵の此國を滅すを見んと。戰爭ばかりが、國の興廢にかゝるでない。外交談判は尚更ぢやて。國民の監視するよりも、地下の勇士に目を瞋らして、此外交談判を監視して貰つたら。餘程利目があるだらうと考へたから、眼玉二つと致すのぢや。此眼玉は地下にある勇士の眼玉。』村『其樣、深き意味は、到底普通の人に理解かねます。尚且目藥の看板と思ふでせう。』先『其では仕方がない。目藥の看板でも宜い。然し普通の目藥の看板でない。明盲目を癒す。目藥の看板ぢや。』

* * * * *

三十三、祝捷會

徳川家康公は大戰の後、必らず大雨ありと言た。今は大戰の後、必

ず祝捷會ありぢや。其は何故かと云ふに、戰へは必らず勝つ。攻れば必らず取るに極つて居るからちや。提灯行列、旗行列さては、模造軍艦の爆發、烟火、園遊會、最早趣向は一定して居る。今度の海戰はネルソン以上の勝利だから、新趣向で祝捷會を始めたら、何だらふ。相『君の考へ大いに宜し。然し僕に何の考へも無いから、今度は萬事君の考案に任す。其趣向は從來の祝捷會、以上と爲たいのぢや。』篤宜し〻〻。先づ開會の趣意は、例の雄辯で僕がやる。君聞たまへ。諸君御承知の通り、日本海の海戰は、古今未曾有の海戰で、其成功はネルソン以上とある。誠に目出度ことですが。日本の嬉ひこと許り述て居ても、珍しくありませんから、今度龍宮から日本政府へ、小言のあつたことを申上げます、其趣意は日本の領海に於て、海底權を得んとした、始めは、平家の一門ですが。彼等は公卿の弱虫共もあり。且つ日本に育つた勇士もあるから、聞分が宜いだから、我を屈して遂に平家蟹となつて、今に服從して居る。よつて我領内には、何事もない、其後は元寇の時です。是も海底權を得んとしたが、魚族に命じて屠つて仕舞つた。今度は仲々の大軍、而も軍艦ばかりが二十隻、容易に屠り盡し難い。露國一度海底權を得ば、太平洋の提督などゝ洒落て居るから、我領內の攪亂し。龍宮世界の危急存亡に關する事ですから、援軍を請ふとの鰐公よりの報告ですから。東郷大將に宜しく、お賴み申すとのことです。日本が海上權を得たので、負けぬ意で、海底權を握らんとして、累を龍宮世界にまで及ぼす、兎角露國は此世界の厄介物ですと、開口する。然すると會員

の一人が立つて、斯云ふのぢや。露國は亂暴な國です。今度の海戰で敗けた連中に、御苦勞であつたと、勅諭したさうな。敗けても勝つても御苦勞は、やはり御苦勞だが、勝つて言はれる御苦勞なら、國王だから嬉いが、敗けて言はれるのだから、迷惑だらふが。或は打沈められて、海底權を得たとの洒落を、眞實に喜んだのでなからふが。———然すると、クロハトにも日本人は黑鳩と云ふから、地上で敗けたら、空中權でも得よと訓諭するだらふ。其時は又鳳凰殿より援軍と云はれた日には、甚だ面倒だから、龍宮世界の哀願は、先づ斷つて然るべしと云ふのぢや。其から飲にかゝる卓上には、最も大なる洋燈に、油寄進ニコライ一世と記し。（アブラキシン。ニコライ一世。共に捕獲軍艦の名梨子と瓜との水物には、蟻寄と注意し（捕獲軍艦の名。昔大名の吸物と云ふには、白餅(城持)を入れた、例もあるから。第三艦隊司令官として、根深に豆腐の蓋物、斯樣臭ひ不味ひものは、喰れないと云へば、少々(少將)盛つておきましたと答へ。其れでも喰ぬと言たら、繿縷爺のアレキサンドル三世と云ふ、（ボロジノアレキサンドル三世擊沈艦首)料理人か出て、諸君喰れなけりや。乃公喰と逃げかゝたので、（オレーク逃走艦名此視席は、日本流だから、立て居ては無禮だクニャ々々々々爺坐らふと、（クニャージスワロフ擊沈艦名吐鳴れて、オーロラ、、、と馬尼剌邊まで逃げゆく樣子で、餘り沈んで來るから、今度は露國艦隊所屬の病院船を捕獲して、看護婦か藝者か知らないが、看護婦と言つて居るから、看護婦ぢや。其看護婦の美人をスラリと列席させ。バルチック艦隊出發以來の狀

況を問答し。飲み且つ喰い。然して美人を開放する。其時塵芥取殿が美人に揶揄つたので、塵芥取殿凄いと冷評したのが、口論となり。多勢寄て打て〱打ちまくり極畢雪隠の隅に擱岸させた。(ドミトリドンスコイ松島東南岸擱岸)其から媾和談判の下相談として、茶會を開く。何と面白き新趣向であるまいか。相『頗る妙ぢや。君の話しの間に、不知不識釣込れて、其祝捷會に居たやうな氣持がした。然し露の外交は、鯰瓢簞主義で、全權委員は駐佛公使、練豆腐にしたとか夫を全權委員としたら何ぢや。日本にも高野豆腐、氷豆腐、信州の氷蕎があるから、或は豆腐に金利目がないから、豆腐は御免と駐米日本公使に謝絶させると。登『然すると、露國は眞平と云ふ。二つ合して眞平御免となる。何處から謝絶したのやら、判明

ぬことになる。横槍先生一本突込んで云く、日本の公使は高平で、眞平でない。仲々の外交家だから、ネリドフ華盛頓へ來たならば、朋遠方より來る。亦た樂しからずや位はやる。』相『其様滑稽じみたことが云はるゝものか。』登『否其れは滑稽でない、公使(孔子)の言葉だ。』横『何しても、目下必要なものは、元老會でない。宿將會(祝捷)』

* * * * *

三十四、午睡

温井君々は、いつも宰予先生を氣取るので、困る。起ないか。孔子は朽たる木だと言つたぞ。朽たる木なら、薪で賣つても價値が安い。最早日暮だ。温『我今胡蝶となつて。』登『日暮まで寢て居て、胡蝶も何

もあるものか。君まだ目が覺めないか。目が覺ぬなら井戸端で、頭から水でも浴たら何だ。温『今日は何だ、君は甚だ酷にやる。ナー孔子の朽たる木などゝ言つた、時分は、睡眠は衞生に、密着の關係のあることを知らなかつたからだ。某博士は睡眠は身體發育に付て、欠くべからざるものだと云はれた。孔子も人を責るには、頗る冷酷だが。孔子自身が何かと云ふに、年が年中周公に夢中になつて居て、其れで足らいで、夢にだも周公を見ずと。可笑や夢中に夢を見られないと、口說く人だから、仲々の寢ぼけぢや、此寢ぼけの生れた國を見たまへ、まだ目が覺めないと云ふだらふ。さうすると寢ぼけの國の、寢ぼけの言を假て、僕を責むる君も、又夢中の人だ。寢ぼけだ。聾『何も君の口には、寢ぼけが付て居るやうだ。寢ぼけの寢言、是又一入眞味がある。某博士は睡眠は兒童が身體發育に付て、必用だが。年齡に於て長短があると言つたのである。人は或程度まで睡眠は、必用なれども、程度以外は必用でなき而已ならず、却て衞生に害ありぢや。今君が年齡に於ては、長時間の睡眠はいらない。又孔子は周公崇拜の人であるから、寢ても起ても崇拜の念は、斷ぬだから、夢にも見るだらふ。君の云ふ通り、支那が此頃漸く目が覺めたとか、南京虫や床虫に、嚙られて目が覺めたのだらふ。自覺でない。追々急所を嚙られるから、目が覺めたのじや。目が覺めて見れば、自國の領土にいろ〳〵の虫が居て、嚙つて居ることが判明た。然し目の覺め方が晩いが。覺めないよりは先以て結構ぢや。君も然ぢや。覺さずに居られない時になつて目が覺めても、目が暮ると共

に、日が暮るのぢや。温『君も理解ぬことを云ふもの哉ぢや。猫が鼠を取んとする。先づ寢むる目を構へ、然して敵に油斷をさせ、隙に乘して取るのぢや。世に猫を被るとは是を云ふのぢや。又良賈はかくして空きが如く。君子は盛德あつて、容貌愚なるが如しぢや。昔は城を枕にとあるから、定めて睡眠たのであらふ。今度の海戰に我艦隊は、戰爭の準備は常に成り居ることゝて、別に忙ケ敷こともなし。敵艦に會するは、午後の一時過にもあらんと、まづ十時四十五分に晝食して、非番のものは隨意休憩、アチラにゴロ〻〻コチラにゴロ〻〻中には鼾聲雷の如きものもあつた。實に勇士と言つてある、僕も暫く猫を被る。容貌亦愚なるが如しぢや。警『君彌々云ふて彌過てり。城を枕にするとは、打死にする意味ぢや。敵を目前に見て眠

眠に就くは、最早生死の兩頭を斷ち。一劍天によつて寒し。心中生もなければ、死もない。たゞ君國あるのみ。敵來らば戰あるのみ。と云ふ軍艦枕の大勇士ぢや。君は猫を被ると言つたが、君の被るは猫でない。家を枕に蒲團を被る。寢子ぢや。温『君知らぬか、蒲團着て寢たる姿たや。東山實に妙ぢや。僕が寐すがたは、東山山紫水明のところ。ソリヤ大の字火。ソリヤ斯すると船火の形だけれども。家を枕にとは、打死にするの意か。警『打死にするの意でない。藏跡に自慢の嗅と、餓死にの意ぢや。

* * * * *

三十五、かも知れん

中秋の夜景は、月まどかにして氣は清爽。斯樣好時節に、下宿屋の二階に、明日の教科書に忙殺せられて居るのも、無風流だ。いでこれから散歩を試みんと、ステッキ採つて戸外へ出た。新派の俳句でも、唸なつて見たくならねど。なか／＼出ない。マアこれでは口から出まかせとして、二三歩行つた。何か一つ／＼と思つて居ると。一ッ日比谷公園の大會は、國民が媾和條約に滿足せぬ、不平の聲かも知れんと出た。底で一ッ二ッを、頭に付けかも知れんを下に付け十ばかり、云つて見やうと考へた。二ッ不平の聲を利用して、暴徒が暴威を逞ふしたのは、千載拭ふべからざる、我歴史の汚點となつたかも知れん。三ッ美事に、リチウイッチに一擊を加へ。かれが鼻柱を挫かれなかつたのが殘念だと。大山將軍が云ふかも知れん。四ッ世の中は喧しくても、喧しなくても、早晩お鯉に乘つて、仙人を極め込む、桂どんの下心かも知れん。五ッ、いつも陸海軍には、天佑があつたが、外交談判には、ナゼ天佑が無からふかと。軍人の遺族が云ふかも知れん。六ッ、六ケ敷ことを、オッ始めたので、其職に居堪らず。足立で逃出したので、少々氣持が宜ひと。市民が云ふかも知れん。七ッ、なんで樺太半分割讓したのであらふ。吾々仲間が水先案內まで仕てやりながら。甘ひ汁が十分吸れないと。代議士共が云ふかも知れん。八ッ、ヤレ／＼匕加減のわるひ人哉。お醫者サマの家に生れながら。最う伴食の脉があがつて居るのに、匕を投ないとは、臨終際のわるひ人だ。鼻の下があきまさですぼまらないと、官房の人が云ふかも知れん。九ッ、小村全權の病氣が、肝臟だとか、

あまり肝膽相照しすぎた、結果では無らふかと。米國のドクトルは、云ふたかも知れん。十、東郷大將は天佑が、滅茶々々になつたと云ふかも知れんと。獨り言して、檢間所の前を通りければ、時節柄何を云つて歩く、住所姓名を名乘れと、大喝せられたので、吃驚仰天したもの〻、ハツと腰をかゞめて、元私は中國生れ。樣子あつて都の住居。ナンダ淨瑠璃のやうなことを云ふ毛唐人め。

＊　＊　＊　＊

三十六、魂の入れ替へ

オイ文川居るかと聲をかければ、誰だ。武田だと答へて、襖を明け、坐を占て云ふやう。僕は今新橋に着車て、其から歩行て來たが、所々の交番が毀されて、其替りにいつも見慣れぬ、檢問所が出來て居る。休暇已前とは、市中が丸で違つたかのやうな氣がする。文川『君も左樣思ふか。僕もさう思ふ。然し今回の媾和――。武『僕は、ナー正宗も持主によると思ふ。唯今では媾和條約に異議はないが。媾和談判に當る人物を得なかつたのには、實に失望落膽ぢや。若し日本に日本海に於ける、東郷。滿洲に於ける大山にひとしき豪傑が、外交の局に當つたならば、遼東還附の如き談判や、樺太半分的談判は無いだらうと、堅く信じて疑はぬ。返す々々も外交に其人を得ないのが、殘念だ。文『如何にもさうぢや。斯樣ことになると、思ひ出すが、ナー平素豪傑顏して、斯んな場合に、國民の志望を滿し兼る、非似豪傑共が、面憎くなつて堪らぬ。武『日本は外國と戰端を開かば、

必ず勝に極つて居るやうだが。其と同時に、外交には十分の効果を得られないのも、極つて居るやうだ。豐臣氏の英邁の資を以てすら。さうぢや。かれが唐冠を禿頭に戴いて、珍がつたが。國書を讀んで意味を知り。俄に怒り出すところ。殆ど滑稽ぢや。又幕末の外交談判は、頗る強硬で、能く其當を得たことが、少くない。これは人を斬る刀でなくて、自分の腹を斬る刀を、片手に持て遣るのぢやからぢや日清の媾和談判も、日露の媾和談判も、みな戰勝と云ふ利器を持て、遣て居るのに、幕末の談判ほどに、行ないのが、畢竟一兵卒が國家を思ふほどの、至誠が無いから、外交も振はないのだらふ。如何なる大人物も、至誠が無くては、駄目だ。文『維新の頃は、勤王と云つて精神的の人物も多ふかつた。爲に能く大業を成した。其結果小身者がいつかな、位人臣を極むるやうになり。隨つて夫に附隨した、二流三流の人までが、朝恩に浴し。華奢に流るゝと共に、精神的の人が少なくなり、官海に游泳するを、一種の營業の如く、心得の輩が多くなりて、實に歎はしき現象ぢや。これが藩伐内閣の末路であらふ。新鮮なる政黨内閣を作つたら。少しは活氣を生ずるかも知れん。武『政黨内閣としても、同じくだらふ。文『否さうであるまい。日比谷公園で、國民大會のとき、公園の四門を丸太で固めて、一人も通さ無つた。其上、室田署長が蠻力を以てしても、通さないと云つて居たのを、一言の下に叱責して、數萬の人を通した、東京市の參事會員連中を見たまへ。其談判の活氣ある。而も機敏なること驚くべしぢや。あの連中は政黨ではあるまいが。武『通さないと云

ふところを、數萬の人を通したは、實に活氣ある談判だが。あれでも市會が始まり、利益問題でも出やうものなら。鼻持のならぬことを云つて、精神がいつの間にか退て了て、蟬のぬけがら同然の人間となり。他人どころか、自分が世間を通られないのぢや。よつて大臣も、代議士も腐つた魂を入れ替て貰ひ度い。友『入れ替る魂ひがあるか。武『あるとも、々々々、國家の爲に忠死した將士の魂を入れば、宜けれど。腐つた魂のすてどころの無に困つた。

* * * * *

三十七、駄法螺の相吹き

一日机前に靜坐して、いろ〳〵のことを默考して居たとき。一友人來りて、料らずも駄法螺の相吹きが始まつた。友『餅田君餅を燒くと、プーとふくれるが、あれは何だか知つて居るかい。餅『サア始まつた。あれかい。あれは空氣の膨脹するのぢや。友『君はえらく六ケ敷ことを云ふね。其なら日比谷公園に、國民大會がプーとも云はずにふくれて出たが。あれは何であらふ。餅『あれは媾和條約に反對する國民の、否東京市民のオット、提灯持の不平がふくれて、出たのであらふ。何でも頭なしに言せてをけは、宜のに、抑止付たから騷動が持上つた。友『何うも君は、國民新聞の提灯を持つな、頭なしに抔とは言語同斷。餅『さう怒りたまふな。僕は國民新聞の提灯は持ぬ。僕は僕の意見を云ふのぢや。君きゝたまへ。從來政府が何か云ふと。直ぐ反對。然しては買收せられ。一も二も無い。反對と買收を議員

の役徳のやうに思つて居るではないか。今度も大屈辱ぢやとか。何とか蚊とか云つて、置て、臨時議會に賣收されるのだらう。友『馬鹿を云へ。今度の媾和は、小兒に云はせても、大屈辱たることを知つて居るでないか。僕『サア聞たまへ。僕は政治家でないから、深くも了解らぬが。回顧すれば、日清の役遼東還付の當時、今のやうに抑へ止つけなかつたから、騷動もなかつたが、頭なしに言つたことは、目今よりも一層烈しかつた。其言草の骨とも云ふべき點が、斯ぢや。人民に重き負擔をさせて、製造た軍艦は、何の爲にするのぢや。かゝる屈辱を受くる、道具でもあるまいと吹き立てた。これが其頃民間に受けの宜き議論であつて、非常に歡迎されたのぢやが。其か本物となつた場合は、實に國家を危ふくする、議論ではなかつたらふか。なるほと、松島や橋立は、當時有力な軍艦であつたに、相違ないが。今より之を見れは、君は何樣な感覺が起る。昨年開戰の初め、浦港の毒蛇が商船を沈め、我海岸に暴威を逞ふしたとき、帝國の海軍に、軍艦の不足を思はなかつたか。吾々は、此上幾許出しても、軍艦は造らねばならぬと、思つた。今度が今度まで、軍備縮少論を唱へた人もあつたが、戰史あつて以來、なき大戰をオッ始め。戰線く三十里の、五十里のと聞くさへ、驚くべきぢやが。實際見たら何であらう。夫に五十萬百萬の大兵は、十二個師團で、現狀の持續が出來得るであらうか。僕の考へは、宣戰の目的を達し國威を海外に發揚せしことは、遼東還附の當時とは、比べものでないと思ふ。喩へ十年を經ずとも、少しく冷靜に事の眞相を考へたならば、――友『何

たる腰弱き議論を吐く。其樣ことでは、國家の爲に戰場に、死した忠魂に、言譯が立つだらうか。鮮『宣戰の目的を達したら、みな喜んで瞑するに違ひ無い。今後戰を繼續して、五億や、七億の金を取つても、今後戰死する將士と、遺族に申譯があらうか。國の爲にこそ死すれ。金の爲に捨る命はない筈ぢや、然し吉川や足立の、抑止つけ療治は、僕は不贊成ぢや。あの連中は是非鼻下あきまさと、せんけりやならぬ。友『それ見たか。何程政府の提灯持でも、惡いことは惡いと思ふだらふ。鮮『君等は何と譟でも、臨時議會が開けても、政府は買ないぞ。友『買なけりや、何する。鮮『三百の禿頭胡麻鹽頭は、みな御拂箱ぢや。其時撰擧區民に宜しくたのむと言はなけりや。男だけれど、平身低頭撰擧を爭ふ、入費がないからと、泣かぬばかりに遭つたら。やはり頭なしぢやと、未來の總理大臣を相手として、盛に議論を戰はして居た。すると、ズドンとひゞき、首筋がヒヤリとしたので、サア頭なしになつたと、暫時は人心地もなかつたが。能く考へて見たれば、ズドンは手砲で、首筋のヒヤリとしたのが、氷嚢が頭から落たのであつた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

三十八、鮎も飛び河鹿も飛ぶ

年魚も飛び、河鹿も飛ぶ。東京日比谷公園の國民大會で、媾和に反對したと聞ては、全國到るところに、媾和反對の聲を上げた。然し、一般人民の聲かと云へば、さうでない。媾和反對と云ふ人は、腹の

中から反對かと推せば、これもさうでないやうだ。全國市と云ふ名の付くところでは、例の生噛り。物知り、顔共が、時局問題、政談大演說會と名乘を擧げて、大屈辱の媾和は反對だと云ふところは、多少人氣があるやうだが。戰爭繼續と云ふ話になると。ウンともスウとも、云ふものがない。先づ是位の演說會が、地方の上乘なので、町村となれば、此種の演說を聞に行くものがない。政黨やは、人民總代だの、町民總代だのと云ふ名義で、屈辱的の媾和が、何の斯のと云ふ、電信を以て貴衆兩院議長の手許、或は總理大臣の許へ、送つたりして居るが。尻探しに遇つて、汝に人民總代として、町民總代として、斯んなことを云へと、誰がたのんだと。一本遣れたら。グウの音も出ないのが。十中八九ぢや。去る頃(乃ち媾和成立の入電四五日後)ある處に召集せられて、入營する兵士の送別會があつた。酒酣にして、西洋小間物屋の生噛り先生立つて、演說を試みた。諸君今回の媾和は、吾々國民が忍ぶべからざるの大屈辱ぢや。賠償金は拂ない。土地は割讓しないと云ふ。斯な媾和に國民が反對せずに居らるゝものか。よつて吾々は、吾々の目的を遂するまで、一年や半年戰爭を繼續しても、遣ずんばあるべからずを始めた。すると隣りの桶屋の父爺、質問があると、二王立ちに立て、汝は戰爭のために昨年からと云ふものは、店がさびしくて、休業同然。客がある無いのと、毎日のやうに口說き立て、剩さへ軍人家族援護會に出金するのが、迷惑だとか云つて居ながら。自分の家から出征軍人の無いのを幸に、能くも其樣ことを云へたものだ。戰死しても負傷しても、

碌に慰問した覺へもあるまい。吾々は兄弟二人を出征させ。兄は旅順で悲慘な最期。これも宣戰の目的を達するに付ての、吾々臣民の勤めだと、落る涙だを抑へて居る。弟は奉天の會戰で、大負傷命だけは助かつたもの〻、生も付ぬ片輪となつた。たゞ不幸中の幸は、相續人を失はなかつたことだけが、年老二人が喜んで居るのぢや。其上、今日の生計と云つたら、耻しいことだが、稼人が居らなくなつたら、實に困難をして居る。貴樣達こそ、祝捷會の何の蚊のと、名前を付て、酒を呑で嬉がつて居るが、吾々は一戰毎に大心配、無事だとの手紙の來ない内は、碌に飯も喉を通らない。吾々ばかりでない。日本全國の軍人の家族は、みなさうぢや。然るに宣戰の目的を達しながら。土地と金とを讓與ないから、戰爭を繼續する。柄にも似合ぬ、大竹切りめ、東京の市民は交番を燒た。田舍のものは、貴樣のやうな向見ずの、大馬鹿ものを片端から、袋叩きに叩き込んで、生嚙り共の征伐を始めるのぢやと、云へさま。平手で以て、側面をピシヤリ〳〵と、七ッ八ッ逃げんとすれど、逃がすものか。すでに危きところへ。人あつて引分けたりすると、一人禿頭立て、諸君暫時。お靜かに願ます。只今の衝突は、事の眞相が判明りませんから。か〻る亂暴なことが、始まるのです。今回の媾和。——何に藪醫者め。宣戰の目的を達した。媾和には、日本全國出征軍人の家族に、一人も異義は無ひ。一度でも敗て見よ。今のやうな媾和條約が出來るものか。貴樣には、出征して居る餓鬼が居ないからぢや。一人でも出征して居たら。人より先に泣き出す。卑怯もの。事の眞相

抔と、能くも口から出ることぢや。其所動くな。朝鮮の虎の代理をして、貴様の腕を嚙つてやる。サア來いと云ふや。眞の猛虎に追はれたかのやうに、逃げて了つた。斯なつては、宴會の席上も、白けて、入營の兵士も立つに立れぬ、場合となつたところで、仲裁するものがあつて、媾和談判が始つた。結局双方の言分を取消し、叩き得、叩かれ損となり。更めて手打の宴會が始つた。一同胸襟を披きて、飲む食ふ話すと云ふ。底拔けの大噪ぎ。サア戰爭も和順になつたからこれより。人氣も引立、商賣もあるだらふ。ヤア內地で稼きが不足なら、朝鮮でも滿州でも、樺太でも、自由自在に稼けると云ふことだが。實に廣き日本と成つた。萬歲〳〵醫者どんが。朝鮮で稼ぐと云へば、止したまへ、虎が居るから、危險だと注意し。小間物屋は、余程酩酊したと見へて、まわらぬ口で無理やりに、私もこれから營口の邊りへ支店でもと云ふや。否遼河の堤防の切れたる如く、嘔吐――ヤア飛だところに、小間物屋の支店。困つた〳〵の最中、電信と一聲、何だと開いて見るに。

『兵士の入營期日延期』

時代笑話　滑稽文學　終

明治三十八年十月十三日印刷
明治三十八年十月十六日發行

滑稽文學奥付

定價金廿五錢

著者　越迺背山

發行者　東京市本郷區駒込東片町廿六番地　吉田正太郎

印刷人　東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地　今井鐵次郎

印刷所　東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地　今井活版所

發行所　東京市本郷區駒込東片町廿六番地　本郷書院

不許複製

賣捌　東京堂、上田屋、前川文榮閣、林平次郎、東海堂、北隆館、良明堂、大阪吉岡、杉本書店、久留米菊竹、名古屋川瀬、星野文星堂、其他各書林

091715-000-5

特12-768

滑稽文学

越廼背山／著

M38

DBO-0188